財団法人 日本ハンドボール協会編　平成22年 2月1日発行(毎月1回1日発行)　通巻507号　昭和40年6月7日第3種郵便物認可

ハンドボール

特集

第19回世界女子選手権大会
第61回 全日本総合選手権大会
男子52回・女子45回全日本学生選手権大会

1·2

JAN.FEB.2010・No.507

［表紙写真：全日本総合選手権大会・女子の部でMVPに輝いたオムロン・藤間選手］

財団法人 日本ハンドボール協会

http://www.handball.jp/

世界を奪い返す あと700日!!

(財)日本ハンドボール協会専務理事　川上 憲太

皆様、明けましておめでとうございます。このメッセージが皆様のもとに届く頃は、すでに年明けから１ヶ月を過ぎ、男子・日本代表チームはレバノン（ベイルート）でアジア選手権に挑戦している時であります。酒巻監督のもと昨年１年間、過酷なまでのフィジカルトレーニングを積み、ロンドンまでの中間点・アジア選手権に挑みます。本大会は、世界選手権予選であり、まずはアジア代表になり、世界への切符をとることが義務付けられています。

ロンドンオリンピック予選は、2012年のオリンピック本大会の６ヶ月以前までに各大陸予選を終えていなければなりません。従って、予選大会まであと**約700日**となってくるわけです。「まだ700日もある」ととらえるか、「もう700日しかない」ととらえるか、であります。この700日の間にはたくさんの事が想像できます。充分すぎるほどの綿密な計画のもとにチーム作りを行うことは勿論ですが、思わぬアクシデントは必ずあります。また、素晴らしい戦力の台頭や新しい状況の変化もこれからです。そこには非常に繊細な心配りと大胆な決断が必要となります。**「ロンドンまで700日計画」**をきちんと推進する意味でもこのアジア選手権の内容・結果を重視したいと思っています。

女子・日本代表は昨年12月の世界選手権・予選リーグでヨーロッパの強豪と戦い、予選リーグ突破ができませんでした。課題は明確になりました。第一が体力・スタミナ、第二が１対１・ノーマークです。西窪強化本部長は「いやというほど痛感しました」と帰国後語ってくれました。あと700日であります。

日本ハンドボール協会は、北京オリンピック世界最終予選を終了してから、**「すべてのベクトルを強化に向ける」**の方針の基で事業計画を推進しています。これは、たとえば普及本部における「小学生・中学生のチーム拡大・大会充実」の活動ですが、これが一貫指導システムを軸に11年目を迎えたNTS（ナショナルトレーニングシステム）の「見つけて・育てる」の目標の土台となり、「鍛える」部分を担うJHAジュニア・アカデミーへとつながり、トップ強化への大きな成果に結びつきます。昨年、日本ユース代表がアジア大会で好成績をあげたことなど次世代への期待が膨らむ所でもあります。マーケティング・広報・財務・競技・総合企画・20万人会等の事業も必ず**「ベクトルが強化に向けられているか」**を軸に活動しております。

昨年、IHF（国際ハンドボール連盟）もAHF（アジアハンドボール連盟）、EAHF（東アジアハンドボール連盟）も新しい人事が発表され、日本もその一員として指名されました。４年間はこの体制の基で運営されます。しかし、日本協会の国際ハンドボール界における地位・発言力・リーダーシップ、いわゆる「国際力」はまだまだ足りません。原因は明らかでありますので、**「国際力アップ」**に努力していく所存であります。２年前に起こった北京オリンピック予選の「やり直し大会」の根本的な原因については、一朝一夕に解決できないと思いますが、一つ一つの国際会議・国際大会を通じて各国と共に行動を起こし、こつこつと行動していくことだと考え、実行しているところであります。

また、日本協会の大きな基盤となっている「社会人」の競技者の存在を顕在化し、活性化をはかるために**「社会人連盟の設立」**が急務となっています。現在、既存の日本実業団連盟、日本学生連盟等の他に、日本リーグもクラブチームの存在が大きくなり、大学の中にも同好会・クラブチームがたくさんあり、全国都道府県には所属の会社や大学の枠をこえたクラブチームの存在は益々拡大傾向にあります。そして、きちんと把握できていないことも現状です。また、クラブチームへの参加を希望する人も多いと想像しています。とりあえず、次年度は現状を踏まえた中で「社会人連盟」という大きな枠の中へ「包み込み」、出来るだけ早い段階で全体組織を作り上げ、登録・大会等の「しくみの改正」を行い、日本ハンドボール協会の基盤の充実に役立てたいと考えています。そして近い将来にはしくみに則った日本選手権大会を開催したいと考えております。皆様のご理解ご協力をお願い申し上げます。

今年は、ハンドボールに限らず日本スポーツ界にとっては大変厳しい年になりそうですが、**「こういう時こそハンドボールが、スポーツが必要」**だと思います。日本のハンドボールを支えて下さった、たくさんの諸先輩の努力を思い起こしながら、皆様と共にチームワーク良く頑張って参る所存であります。今年も宜しくお願い申し上げます。

第19回 世界女子ハンドボール選手権大会

〈最終順位〉

優勝	ロシア	13位	スウェーデン
2位	フランス	14位	チュニジア
3位	ノルウェー	15位	ブラジル
4位	スペイン	16位	日　本
5位	デンマーク	17位	ウクライナ
6位	韓　国	18位	コートジボアール
7位	ドイツ	19位	アルゼンチン
8位	ルーマニア	20位	コンゴ
9位	ハンガリー	21位	タ　イ
10位	オーストリア	22位	カザフスタン
11位	アンゴラ	23位	チ　リ
12位	中　国	24位	オーストラリア

日本選手団 団長　山下　泉

2点共　写真提供・スポーツイベント社

1．大会概要

12月5日から20日まで、中国上海近郊の江蘇省の6都市で開催された。参加24ヶ国が4グループ・6ヶ国に分かれて予選リーグを戦った。前回19位の日本はノルウェー（2位)、ルーマニア（4位)、ハンガリー（8位)、チュニジア（15位）とチリ（初参加）のCグループ、蘇州市体育館で行なわれた。強敵のヨーロッパ3国のうち1つは必ず勝利しなければ決勝リーグ（ベスト12）に進出出来ないという非常に苛酷なグループであった。結果は1勝3敗1分の4位で悲願は達成出来ず順位決定リーグに回り、このリーグも2勝2敗で最終的に16位となり、前回大会より3順位上げたが満足出来る結果は得られなかった。負け惜しみになるがハンガリー戦は勝てる内容の試合であり、経験の差による詰の甘さが出て快挙を達成することが出来なかった。※（ ）は前大会順位

2．大会運営

蘇州市体育館は、昨年4月実施の東アジアクラブ選手権大会の男子会場であった。他の会場は高速道路で2～3時間の遠距離にあり、視察することは不可能であった為、運営の状況は不明であるが蘇州会場は宿泊、食事、輸送、通訳、会場設備、記録速報は十分に満足出来る状況であった。ただ一つ、観客は毎試合100人未満と盛り上がりに欠けた大会であり、中国の出場したDグループの常州も同様であったと聞いた。IHFは中国協会に対して観客数についてきびしく指摘したことを知らされた。

運営能力については北京五輪を成功させた自信が感じられるレベルの高さを見ることが出来た。

3．ITハンドボールの推進

各会場の公式記録は試合終了20分後には詳細なデータが発信され、日本でも同時にインターネットで見ることが可能であった。誌面の都合でその一部を掲載する（次頁)。

現在、日本協会、日本リーグで使用されている公式記録用紙は極めて簡単なものであり大きく世界から遅れをとっていると云える。以前から電算、競技の担当理事に改善の提案をして来たが、オフィシャル人員が沢山必要になるという理由で今日まで実現していない。因みに中国では5人が担当していた。

ITハンドボールを指向する為にはより詳細なデータの提供が重要な要素となる。強化を考えると現状の大雑把な記録用紙では分析することも不可能である。

4．体格と国際試合経験の比較（平均）

国名	身長cm	体重kg	出場試合数
日　本	167.7	63.1	24
ノルウェー	177.2	—	80
ルーマニア	177.4	70.4	72
ハンガリー	176.7	67.0	48
チ　リ	165.1	63.9	5
アルゼンチン	171.8	67.9	53
ブラジル	171.8	69.1	42
カザフスタン	178.9	69.9	—
韓　国	171.8	63.4	—
中　国	179.8	67.9	52

チュニジア、コートジボアールは記録なし

写真提供・スポーツイベント社

この比較を見てどう感じられるかを問いたい。強化方針を確立し、長期的視野に立って構造改革を進めるかが必要である。格闘技であるハンドは体力の差が大きなハンディキャップとなるのは明白である。世界との体格の差は開くばかりと感じており、男子チームも同様である。中、高、大で考えると目先の勝利にとらわれ、小さくても器用な選手を重用される傾向がある。世界と戦うには大型選手の発掘が必須条件であり、その為にはバレーやバスケ界の選手をハンドへの転向を呼びかける位の熱意が必要であり､そして辛抱強く育成することを提案したい。世界の185cmのプレイヤーは早く走れ、フェイントも出来る運動能力を持っている。日本の選手が3人で守っても引摺れるだけの体力があり、しかもシュート力も有している。今大会の戦ったどの試合も後半の体力消耗度が目立った。今やヨーロッパだけでなく南米やアフリカ勢も強化が進んでおり、日本の現状を考えると焦燥感を抱かざるをえない。強化指定選手は必ず海外に挑戦させ、世界を数多く経験させなければ明日はない。

5．戦略面に対する私見

オリンピック出場、世界選手権上位入賞を日本ハンド界が目指すことが第一の目標である。したがってこの大会は集大成の舞台、いわば決戦場であるべきであり、その為には選ばれた監督、選手が一体となり勝利を目指す責務がある。選手の起用、作戦をどう展開するか監督の責任として果たすことが宿命であり、他の人が口出しする余地は無いことを十分承知の上で意見を述べたい。それでなくても得点力の劣る日本選手の中で日本リーグの得点王で最も期待されるべき選手を14名のベンチから外すことはどう考えても不可解である。当然に経験のない新人を投入してよい結果は得られなかった。日本の代表として是が非でも勝つという執念が欠如していたとしか言えない。

Suzhou

SUN 6 DEC 2009
21:15

XIX Women's World Championship 2009
China
Preliminary Round Group C

Match Team Statistics

Spectators: 200

Match No: 21

JPN 28 - 37 ROU
(17 - 17) (11 - 20)

Referees: BRUNOVSKY P / CANDA V (SVK)

JPN - Japan

Players		Shots								Offence		Defence		Penalties				TP
No.	Name	G/S	%	6m	Wing	9m	7m	FB	BT	AS	TF	ST	BS	YC	2Min	RC	EX	
3	TAKAHASHI Megumi																	0:16
5	ITO Aimi										1			1				21:01
6	UEGAKI Akie	8/14	57	1/3		2/6	1/1	3/3	1/1	2	8							52:58
7	SHINJO Akina	2/4	50		2/4						2							45:27
8	SAKUGAWA Hitomi	5/7	71		4/5			1/2		1	2							58:54
9	SAKAMOTO Tomoko	1/2	50					1/2		2	1			1	1			60:00
10	FUJII Shio	5/10	50	0/3	1/2	0/1	4/4			5	3	1						37:20
11	NAKASONE Aya	1/4	25	1/3				0/1			1							2:48
14	MAKI Karina	1/1	100	1/1														3:09
16	TASHIRO Hiromi																	46:46
17	ARIHAMA Yuko	5/13	38	0/6	1/1	1/3			3/3	4		2	1	1				57:33
20	ISHITATE Mayuko										1							6:01
22	FUJIMA Kaori																	13:14
25	TANABE Yuki	0/1	0		0/1													14:33
	Bench/Team																	
	Totals	28/56	50	3/16	8/13	3/10	5/5	5/8	4/4	14	19	3	1	3	1	0	0	

Goalkeepers		Total Shots		6m Shots		Wing Shots		9m Shots		7m Shots		Fast Breaks		Breakthroughs	
No.	Name	S/S	%	S/S	%	S/S	%	S/S	%	S/S	%	S/S	%	S/S	%
16	TASHIRO Hiromi	8/34	24	4/9	44	1/6	17	1/5	20	1/3	33	1/4	25	0/7	0
22	FUJIMA Kaori	1/12	8	0/2	0	1/3	33	0/1	0	0/2	0	0/2	0	0/2	0
	Totals	9/46	20	4/11	36	2/9	22	1/6	17	1/5	20	1/6	17	0/9	0

Team Shots	Goals	Saves	Missed	Post	Blocked	Total	%
6m Shots	3	4	3	2	4	16	19
Wing Shots	8	4	0	1	0	13	62
9m Shots	3	5	1	1	0	10	30
7m Shots	5	0	0	0	n/a	5	100
Fast Breaks	5	2	1	0	0	8	63
Breakthroughs	4	0	0	0	0	4	100
Totals	28	15	5	4	4	56	50

Number of Attacks: 70, **Scoring Efficiency:** 40%

Suzhou

SUN 6 DEC 2009
21:15

XIX Women's World Championship 2009
China
Preliminary Round Group C

Match Team Statistics

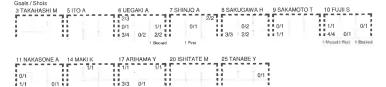
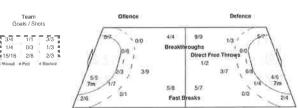
Spectators: 200

Match No: 21

JPN 28 - 37 ROU
(17 - 17) (11 - 20)

Referees: BRUNOVSKY P / CANDA V (SVK)

JPN - Japan

Shots Distribution

Goalkeepers
Saves / Shots

0/4 2/4 0/4
2/5 3/3 1/7
0/12 1/2 0/5

16 TASHIRO H

0/3 2/4 0/4
2/2 3/3 0/5
0/7 1/1 0/5

22 FUJIMA K

0/1
0/3 1/2
0/5 0/1

最終的に3つ順位を上げたことにより、よく戦った、惜しかったと言えるかも知れないが、もう20年以上も同じ言葉で反省し、慰めあってきたのが強化の現場である。今こそ大改革を進める必要がある。世界の各国の強化は大きく進んでおり、止まっていてはくれない。現状では先の希望は見えない。

苦言を述べましたが日本を強化する為に私自身の反省を込めての意見であり、お許し願いたい。

世界選手権を終えて

女子代表ヘッドコーチ　黄　慶泳

大会の準備について

女子代表チームは世界選手権を準備するに当たって重点強化ポイントとして考えたのは、トータルフィットネス強化（スピード、パワー、スタミナ）＆テクニック（スキル、ゲームマネジメント力）を身に付ける事でした。

1時間戦うためのスタミナ強化は勿論、試合の流れ、戦術変化に対応出来る試合運営テクニックを身に着けて、チーム全員が意識共有しながら試合を運ぶことでありました。

その為に、NTCの施設と器具を利用してフィジカルを強化し、国内男子高校との練習ゲーム、海外遠征（国際試合経験）を企画・実施してまいりました。特に高校男子とのゲーム、海外遠征での国際試合経験は、大型対策と戦術変化を感じて対応出来る組織力強化に良いトレーニングでしたし、貴重な経験であったと感じます。

選手選考については、4月から7月までの間には若手育成と底上げをテーマとして取り組み、大会の直前合宿から（11月11日）は国際試合経験が豊富であるベテランを若手と融合させて準備する流れで世界選手権を迎えました。

世界選手権について

初戦のノルウェー戦においては、日本は勢いがありましたが、ノルウェーの守りから速攻に転じる時のチャンスを作り出す想像力・判断力とスピードは世界一のものを実感しましたし、その違いが敗因の要因でもありました。

第2戦はルーマニアの気力に負けないで後半中盤までは優位に試合を運べていて全員が一つになって戦っていました。

結果は負けでしたが、試合内容と選手の戦いぶりは収穫が沢山あったと思います。

第3戦のアフリカ勢チュニジアとの試合は、独特な柔軟性とパワー持っている相手に選手のファイティングスピリットは素晴らしかったと思います。しかし、後半の疲れと試合マネジメントの経験不足もあって引き分けで終わったのは非常に残念でしたし、大きな課題を残した試合でもありました。

第4戦の南米チリとの試合は順調に勝ち星を得て、第5戦は決勝ラウンド進出をかけ大一番である北京オリンピック4位のハンガリー戦でした。前半は相手を慌てさせて、自分たちが用意していた戦術も成功していて、選手達の運動量も豊富でした。しかし、後半15分過ぎから1点を争う勝負所で疲れが見え始めてから突き放された試合展開となりました。

予選ラウンド4位で決勝ラウンドには進出できませんでしたが、選手たちともう一度下位リーグの**プレジデントカップ**の最上位を目指す事を確認し、気持ちを入れ替えてくれることを期待しながら**第1戦**のカザフスタン戦を迎えました。前半は守りが広くなってしまいましたが、後半からはボールにコンパクトに守ることができ、速攻の点数も増えて流れよく攻めていたと感じます。何よりも選手らが次の目標に早く切り替えて戦ってくれた事が嬉しかったです。

第2戦のアルゼンチン戦は、自分たちが準備していた戦術の流れと異なった試合展開となりました。戸惑いがあったのも事実で、パスとシュートミスが続いて自滅したゲームとなりました。今まで日本のレベルが上であっただけに、負けは非常に大きなショックであったと思います。但し以前と違ってアルゼンチンも侮れない強さを持っていました。

第3戦のコートジボアール戦は、前日の負けから尾を引かないで誇りと自信を取り戻す為には非常に重要な試合でした。前半立ち上がりから攻撃的な守りからの速攻とセットプレーで得点を重ねながらリードを保ったまま折り返しましたが、また後半失速して追いつかれてしまいました。接戦の末に1点差で劇的な勝利を収めましたが、後半の戦いにまたも大きな課題を残した試合でした。

結果としては残念ながらプレジデントカップの2位で終わり、**15位決定戦**では南米の強豪であるブラジルとの試合でした。試合のテーマとしては、日本がベースとして考えている戦い方を最後まで信念と誇りを持って戦う事でした。そして、いま現在後半の戦いに大きな課題を抱えているので、その点を全員が認識して粘りのある戦いをすることでありました。結果としては、前半の2点差がそのまま響き、2点差での敗退ではありましたが、選手は諦めないで戦ってくれたと思います。

今後の取り組み

今回の世界選手権の戦いを振り返ってみると、前半は日本の良さであるスピードと豊富な運動量を生かして世界と堂々と戦えましたが、ほとんどの試合が後半中盤以降から失速してしまう傾向でした。

従来からの問題でありますが、これからの強化ポイントとして考えなければならない大きな課題であると再認識しています。

最後になりますが、女子代表チームの強化活動は勿論、大会を準備・参加するに当たってご理解、ご支援頂きました関係者の皆様には改めて御礼申し上げます。特に、男子高校の各チームの皆様にはやり辛いにも拘わらず快く対戦して頂きました事に感謝しております。

女子代表チームは今回の結果を謙虚に受け止め、世界に通用する強靭なフィジカルとメンタル強さが必要だと再認識しています。このような課題をクリアして強くなれるように取り組んでまいりますので、これからも引き続き皆様方のご声援宜しくお願い申し上げます。ありがとうございました。

戦　評

▼予選リーグCグループ

ノルウェー　34（15－9、19－10）19　日　本

前半立ち上がり、固さの見える日本に対しノルウェーはディフェンスから連続速攻で４点連取し、ノルウェーペースで試合が進む。日本は４分過ぎ、植垣のロングシュートで１点を取るが、ノルウェーもセットのロングシュートで加点する。６分、植垣の速攻で２点目をあげたところから日本も落ち着きを取り戻し、６－０ディフェンスで積極的にアタックし、ノルウェーのテクニカルミス、速攻のシュートミスを誘う。11分過ぎには、植垣の速攻、坂元のポストで５対７の２点差に追いつく。その後、ノルウェーのセット攻撃にGK田代のファインセーブなどでしのぐが、日本の攻撃ミスによるノルウェーの速攻で得点を奪われ、20分には７対11の４点差となる。その後、20分過ぎに植垣のロングシュート、23分過ぎに上町の７mスローで加点するが、その後の６分間にノルウェーディフェンスを崩すことができず、連続速攻、ポスト・ミドルシュートと４連取され、前半を９対15の６点差で折り返す。

後半立ち上がり、ノルウェーディフェンスはより激しさを増し、日本にいい形での攻撃をさせない。ノルウェーに５連続速攻で得点を奪われ悪いリズムになったところで、日本は、３分14秒に早めのタイムアウトを取る。タイムアウト後も２連続速攻で得点を奪われ、後半５分には９対22の13点差になる。日本は５分過ぎに坂元、伊藤、東濱のカットインで３連取するが、10分過ぎに再びノルウェーに速攻を許し４連取、15分過ぎには14対28の14点差になる。その後もノルウェーは攻撃の手を緩めることなく、カットイン、速攻と得点を重ね、20分には14対31となる。20分過ぎ、坂元、新城、植垣らの得点で５連取し19対31とするが、その後日本は東濱の退場などもあり、数的有利な攻撃のノルウェーにカットイン・サイドと得点を許し、19対34の15点差で試合は終了する。前後半の立ち上がりに課題が残った試合であった。

〈得点者〉植垣８，坂元４，東濱３，藤井・上町・新城・伊藤１

ルーマニア　37（17－17、20－11）28　日　本

ルーマニアの５－１ディフェンスに対し、開始３分、植垣のロングシュート、４分、佐久川のサイドシュートの２連取で日本が先制する。日本はディフェンスで積極的なアタックをかけ、警戒していたルーマニアのロングシュート、ポストシュートを素早い詰めで対応する。４分過ぎ、ルーマニアにカットインを許したところから、試合が素早いテンポになる。日本はフォーメーションからの東濱のロングシュート、藤井の７mスロー、植垣の速攻、佐久川のサイドシュートと得点を重ねていくが、ルーマニアも大型選手のミドルシュート、ポスト、速攻と得点を重ね、19分には10対10の同点となる。その後、ポストにボールを集められ、連続で７mスローをルーマニアに与えるが、日本も好調の植垣が連続ロングシュートによる得点で、前半17対17の同点のまま折り返す。

後半立ち上がり、ルーマニアに２連続得点を許すが、植垣のロングシュート、７mスローで日本も必死についていき、後半５分、20対21のルーマニア１点リードとなる。しかし、５分過ぎから15分までの10分間に日本は、シュートミス、テクニカルミスから佐久川のサイドシュート１得点に抑えられている間に、ルーマニアは積極的な日本のディフェンスの裏をかき、早め早めにディフェンスを引きつけてパスをサイドまで展開し、サイド、ポストにボールを集め６得点を奪い後半15分には21対27の６点差をつけられてしまう。16分過ぎ、日本は佐久川、センターに代わって入った仲宗根のトリッキーなステップシュート、ディフェンス・巻の速攻、藤井の７mスロー、東濱のミドルシュートで追い上げ、20分には４点差の26対30となる。しかしルーマニアも選手交代をして再びディフェンスを強化、速攻を絡めて攻撃をしかけ25分には再び26対33の７点差とする。残り５分、東濱のカットイン、この試合８点目の植垣のロングシュートで応戦するが、28対37の９点差で敗退した。

〈得点者〉植垣８，藤井・佐久川・東濱５，新城２，坂元・巻・仲宗根１

日　本　31（16－14、15－17）31　チュニジア

本戦ラウンドに進出する為には、日本もチュニジアも共に負けられない試合であった。前半立ち上がり、日本は３－２－１ディフェンスで、チュニジアの強力なロングシューター（№24）、センター（№20）から良い形でパスを入れさせない作戦が機能した。悪いポジションでのシュート、テクニカルミスを誘い、またGK田代のファインセーブもありチュニジアに思い通りの攻撃をさせなかった。その間、日本の攻撃はチュニジアディフェンスを横の速い動きで揺さぶり、前半の８分過ぎ、11分過ぎにチュニジアエースNo.24が２回の退場をしたのを機に、東濱の速攻、藤井・植垣のミドルシュートと得点を重ねた。チュニジアが前半のタイムアウト（16分48秒）を取った時には９対６の３点差となった。その後は、日本が常に２点差をキープし前半は16対14で終了した。

後半立ち上がり、日本のシュートミス、テクニカルミスから速攻に繋がれ、４分32秒には18対19とこの試合初のリードを許した。その後はチュニジアに常に２点差をキープされた状況が続いたが、19分過ぎ、上町の７mスロー、東濱のカットイン、高橋の速攻で22分、27対27の同点に追いついた。25分には29対29となり残り５分間の戦いとなる。残り５分、藤井のカットイン、サイドシュートで31対29と２点リードするが、27分48秒、ディフェンスで競り

合った石立が退場し日本は数的不利な状態になる。その間、チュニジアも粘り強く攻撃し 28 分 4 秒、サイドシュートを決め 1 点差に。残り 1 分を切ったところで No.18 にロングシュートを決められ 31 対 31 の同点で試合が終了する。両チーム共に 1 枚のレッドカードが出る激しい試合であった。
〈得点者〉藤井 10，東濱 7，高橋 4，植垣・新城・上町 3，石立 1

日　本　38（19 － 13、19 － 6）19　チ　リ

本戦ラウンドへ進むため、どうしても落とせないという緊張の中、試合がスタートした。

立ち上がり、プレッシャーからか、動きの硬い日本に対し、高い運動能力を活かしたチリの攻撃が機能する。対する日本は植垣、高橋の連取で開始 7 分には 5 対 3 とリードをするものの、チリの強引なカットインプレーを阻むことが出来ず、13 分に再び 7 対 8 とリードを許す。その後、タイムアウトを機に立て直しをはかった日本は、石立、新城らの若手の活躍などで、徐々に引き離し、前半を 19 対 13 で折り返した。

後半開始早々、エンジンのかかった日本は、唯一大学生で参加する田邉の得点を含む 7 連取で開始 9 分には 26 対 13 と一気に突き放した。その後も、ディフェンスから速攻を中心に持ち味を発揮し始めた日本は、ベンチ入りメンバー全員がバランスよく活躍し、38 対 19 で今大会初勝利をものにした。
〈得点者〉藤井・植垣・高橋 6，田邉 5，新城・仲宗根・石立 3，上町・伊藤 2，東濱・巻 1

ハンガリー　35（15 － 14、20 － 14）28　日　本

予選ラウンドの 4 試合を終えて、1 勝 1 分 2 敗と、本戦ラウンド進出への望みをつないで迎えた第 5 戦、ハンガリーとの対決が幕を開けた。双方この試合に勝てば本戦ラウンド進出という重要な一戦だけに、ゲーム前から両チーム共、より気合の入った様子であった。

開始早々、機先を制したのはハンガリー。速攻を絡めたエース Toth の活躍で 0 対 3 と一気にリードした。しかし、この世界選手権の経験を通したくましさを増した日本チームは、気迫の衰えをまったく感じさせず、GK 田代を中心とした堅い守りから速攻へつなぎ、佐久川、植垣の連取で食い下がる。前半戦の中盤、3 点～ 4 点差を繰り返しながら必死に食い下がり、徐々に焦り出したハンガリーにつけいく。20 分、植垣の豪快なシュートでついに 1 点差に迫る。その後も、藤井、佐久川の連取で一進一退の状態が続き、前半終了間際、2 点ビハインドで迎えた最後の攻撃を、仲宗根の職人技ともいえるランニングシュートで 1 点差に迫り、前半を終了した。

課題の後半立ち上がり 10 分。これまでの日本チームなら、ここで一気にねじ伏せられるパターンが多かったが、この日の日本チームは驚異的な粘りを見せた。エースコンビの藤井、植垣が炸裂し、機動力あるディフェンスで守り、GK 田代も好守を連発。後半 18 分を経過して 2 点のビハインドをキープした。しかしなかなかリードを奪えないまま、ラスト 10 分に突入。ここからハンガリーは、日本の細かなミスやシュートミスを見逃さず、速攻に転じる。残り 8 分から 5 分にかけて 3 連取を許し、26 対 32 と突き放される。残り 5 分、粘る日本だったが、点差を縮めることができず 28 － 35 で試合終了となった。

予選リーグ最終順位を 4 位とし、惜しくも本戦ラウンド進出は逃したが、ヨーロッパ勢相手にも互角に戦える局面を見出すなど、収穫も多い戦いとなった。残るプレジデントカップの 4 試合、ここで成長の証を示したい。
〈得点者〉藤井 8，佐久川・植垣 7，東濱・巻 2，新城・仲宗根 1

▼プレジデントカップ　PC 2 グループ

日　本　33（15 － 11、18 － 6）17　カザフスタン

予選ラウンドを 4 位で終え、プレジデントカップに進んだ日本の相手はカザフスタン、アジア勢同士の戦いとなった。大会屈指の大型選手を要するカザフスタンは、今大会も体型の利点を活かした戦いを重ねている。日本は体格差をカバーすべく、機動力を武器として戦いに挑んだ。

立ち上がり、日本は植垣、新城、藤井、坂元、東濱とバランスよく得点を重ね、5 対 2 とリードし、危なげなく試合を進めるかのように見えた。しかしカザフスタンも粘り、持ち前の大型ポストを活かしたダブルポスト攻撃で反撃を開始。4 連取を含め、19 分には 6 対 9 とし、瞬く間にカザフスタンがリードした。タイムアウトをはさみ立て直しをはかった日本は、カザフスタンのダブルポスト攻撃を積極的な防御で抑え始め、25 分からの 5 連取で 15 対 11 と 4 点リードで前半を終えた。

後半立ち上がり、石立をゲームメーカーとした大きな展開が機能し、3 連取により 18 対 11 と一気にリードを広げた。その後 13 分まで、双方とも相手の攻撃によく対応し、一進一退の展開が続く。抜け出したのは日本、疲れの見え始めたカザフスタンからミスを誘い、14 分過ぎから 6 連取。22 分、カザフスタンに 1 失点を許したものの、再び 6 連取と速攻を主に連取し、カザフスタンを退けた。
〈得点者〉藤井 9，田邉 5，新城 4，佐久川・坂元・巻 3，上町 2，高橋・植垣・東濱・石立 1

アルゼンチン　25（15 － 12、10 － 12）24　日　本

試合開始 2 分、新城のサイドシュートで先制するも、その後、アルゼンチンの粘りのディフェンスを攻略できず、日本らしいボールを動かしての攻撃ができない。不利な体勢でのシュートを GK に阻止され、逆にアルゼンチンの連続速攻を許し、5 分過ぎには 1 対 3 とリードを許す。その後は植垣の

ロング、藤井のロングで得点をあげるが、アルゼンチンも攻撃でポストシュート、カットインと得点を重ね、20分過ぎまで9対12と常にアルゼンチンがリードして前半が進む、20分過ぎ、新城に代わって入った田邉の連続速攻で得点をあげるが、12対15の3点リードを奪われ前半を終了する。

後半開始、藤井のロングで得点をあげるが、前半同様にアルゼンチンの粘りのオフェンスにどうしても連続得点を奪えない。途中、石立を投入し4－2ディフェンスで積極的にボールを奪いに行く。ディフェンスを変えたことでアルゼンチンの攻撃にミスが出始め、後半7分過ぎからの石立、藤井、田邉、佐久川の連続得点により、この試合初めて18対18の同点に追いつく。その後は両チーム共に得点をあげるが、後半19分過ぎ、東濱のカットインが決まり、23対22とこの試合初めてアルゼンチンからリードを奪う。この後は両チーム共に意地の張り合いとなるが、日本は決定打を決めることができない。残り2分を切ったところで再度アルゼンチンにリードを奪われ、24対25とリードを許す、日本は最後の攻撃に望みをつないだが得点を奪うことができず惜敗となった。

〈得点者〉藤井8，植垣・田邊4，新城・佐久川・東濱2，坂元・石立1

日　本　32（16－11、16－20）31　コートジボアール

アフリカ代表のコートジボアールとの一戦を迎えた。コートジボアールは新興勢力ではありながら、先日はチュニジアを一時追い詰めるなど、大会屈指の体格とパワーで、非常に高い潜在能力を有している。不気味な存在ではあるが、先日の敗戦を引きずらず、思いきりの良い戦いを誓い、ゲームに向かった。

立ち上がり、コートジボアールのスピーディーでパワフルな展開に苦戦を強いられながらも、相手の戻りの悪さをついた速攻と、横への揺さぶりを強調した攻撃で、10分まで6対3と辛くもリードを保つ。その後も双方持ち味を発揮し、お互い譲らないまま、23分までに11対9と均衡した展開が続く。最初に抜け出したのは日本、GK田代の好セーブをきっかけに坂元、東濱、上町と連取し5点差をつけると、そのままのリードを保ち、16対11で前半を終える。

後半の出だしも日本ペース。キャプテン藤井の連取などで、開始5分には20対12とリードを広げる。ここで一気に勝負をつけるかに見えたが、コートジボアールも引き下がらない。この日、脅威の14ゴールをあげた、9番の大型ながら巧さもあわせもつポスト・Gondoの活躍で、徐々に日本を追い詰める。さらにはパワーヒッターの5番Mamboが良く機能し、23分にはついに同点に。ここから日本もよく粘り、必死にもぎとった7mスローを上町がしっかりと決め29-28、しかし直後にコートジボアールエースMamboの強引なプレーで再び同点。すかさず日本も高橋の粘り強いサイドシュートで30対29とすると、落ち着くまもなく9番Gondoのポストで同点。その後も互いに一歩もひかないまま伊藤、Gondoで取り合い、残り1分30秒で日本が7mスローをもぎとった。シューターは上町、惜しくもGKに阻まれピンチかと思われた瞬間、ルーズボールを高橋ががっちりつかみ、上町が押し込んで32対31、残り1分の防御が始まる。この日、再三苦しめられたGondoによって強引なポストプレーを徹底してくるが、最後は意地で守り通し、苦し紛れのロングシュートを田代が落ち着いて阻止し、試合終了。苦しみながら価値ある白星を勝ち取った。

チュニジアにつぎ、プレジデントカップ予選リーグを2位で終了し、15位-16位決定戦への進出が決まった。

〈得点者〉藤井・高橋・上町・植垣5，東濱・田邊3，新城2，坂元・仲宗根・巻・伊藤1

▼15位－16位決定戦

ブラジル　31（19－17、12－12）29　日　本

世界選手権最終戦、15－16位決定戦。東濱のカットインで先制する。ブラジルは個人の身体能力が高く、スピードあるサイドの速攻、また大型バックプレーヤーのロングシュートと満遍なく得点をあげてくる。日本も藤井、植垣を中心に、田邉が速攻で得点をあげるなど、前半は一進一退の展開を繰り広げるが、前半はブラジルの2点のリードで折り返した。

後半は前半と対照的に両チームともにディフェンスを積極的な内容に変えたが、それにより両チームともにミスが発生し思うように攻撃ができない。後半9分過ぎ、高橋の速攻で21対21の同点に、さらに新城のサイドシュートで連続得点を奪い、22対21とし、この試合初めてリードを奪う。その後も日本は粘り強くディフェンスを行い、石立の速攻、藤井のロングシュートで得点を奪うが、ブラジルもカットイン、ポストシュートで得点をあげる。後半16分過ぎ、ディフェンスで若干の疲れがでた日本に対し、ブラジルのポスト、サイドシュートなどで4連続得点を奪われ、後半20分には25対29の4点差になる。日本はそれでも粘りをみせ、東濱のカットイン、田邉の速攻、藤井のロングシュートで残り5分28対29の1点差に追い上げる。その後、両チームともに決定打を決められず、残り1分30秒となったところで、ブラジルに2連続カットインを許し、日本も田邉のサイドシュートで得点を奪うが、2点差で敗退となり16位で大会を終えた。

〈得点者〉藤井9，植垣6，田邊4，東濱・高橋3，新城・石立2

▼3－4位決定戦

ノルウェー　31（15－9、16－17）26　スペイン

▼決　勝

ロシア　25（14－11、11－11）22　フランス

第61回 全日本総合選手権大会 男子の部

大同特殊鋼が４年連続14回目の優勝

写真提供・スポーツイベント社

■最終順位

優勝　大同特殊鋼
２位　湧永製薬
３位　トヨタ車体
３位　大崎電気

■個人表彰

最優秀選手賞　武田　享（大同特殊鋼）
最優秀監督賞　清水博之（大同特殊鋼）

全日本総合選手権大会を終えて

東京都ハンドボール協会副理事長　樋口 道夫

平成21年度第61回全日本総合選手権大会は、女子が世界選手権参加のため男女別開催となった。男子は駒沢体育館において大同特殊鋼の4連覇で幕を閉じた。

決勝戦は大同特殊鋼と湧永製薬の一進一退の攻防で最後の最後まで決着をみない素晴らしく、凄まじい試合であった。共に鍛え抜かれた技術と精神力は、まさに賞賛に値するものであった。2000人近い観客・応援団も試合を大いに盛り上げてくれた。また4強のトヨタ車体は大同特殊鋼に延長の末の惜敗、大崎電気も最後まで湧永製薬を苦しめた。今大会、私は運営に専念していたため試合のほうは垣間見ただけであるが、間近で観た中・高校生やハンドボールファンの心を熱くする試合がたくさん展開されたものと確信している。各試合の分析は専門家に任せるとして…今大会は話題性も盛りだくさんであった。高校生であるユース日本代表が学生2位の筑波大学にどこまで食い下がるか、大学チームが4強に食い込むかなど。それぞれに善戦し、溌剌とした技術・戦略を披露してくれた。また琉球コラソンの東長濱GMの子弟の活躍も目を見張った。特に湧永製薬vs日本体育大学の兄弟対決はマスコミでも取り上げられ、両選手ともその期待に応え会場を沸かせていた。

さてこの大会を運営するに当たっては当該年度前の3月より準備に入ったが、途中東京都主管か実行委員会方式かなど揺れ動くこともあったが、日本協会の川上専務や江成常務理事のお力添えをいただき、評価はともかく成功裏に導くことができた。２年前は日本中がオリンピック再予選に沸くなかでの開催であったが、しかし今回は予算面や高校の先生方が学期末の成績会議が重なるなか、スタッフを充分集められるかなど不安もかなりあった。そのような状態を払拭してくれたのが総務副委員長の原田 悟氏である。氏の夜を徹しての補助金獲得、渉外、企画作業があっての成功であり、原田氏に感謝するとともに次開催の反省材料にしたい。それはさておき、日本協会役員の方、事務局の方の助言・アドバイスには本当に助けられた。また多くの協賛企業の方のご協力、東京都協会役員の献身的なご協力、都高体連・中体連の先生方に感謝したい。また関東学連の方には準備・運営と大変お世話になり、彼らがいなかったらこの大会は成立しなかったであろう。ほんとうに色々な方にお世話になり、ただただ感謝の念で一杯である。

そして何よりも大会を盛り上げていただいたファンの皆様、サポーターの皆様、ほんとうにありがとうございました。観客の皆さんのおかげで試合が盛り上がり、競技が発展していくものと再認識し、次大会以降もお客様をお迎えする立場で準備を整えていきたいと思います。

優勝
大同特殊鋼

2点共　写真提供・スポーツイベント社

優勝の声

大同特殊鋼ハンドボール部監督　清水 博之

第61回全日本総合選手権大会で四年連続十四回目の優勝を手にする事ができました。これも日頃から大同特殊鋼ハンドボール部を支えてくださる、多くの方々の力があってこそ成し遂げられた結果だと感じております。ファンや応援団の皆様方の熱い声援、大会を運営するにあたりご尽力いただいた協会関係者、不在の間に業務でご協力いただいた職場関係者、メンバーから外れコートには立つことができなかったが、準備や洗濯などで協力してくれた部員など、本当に感謝しております。ありがとうございました。

4年連続優勝は創部初であり、また14回目というのは史上初ということもあり、今までになく大きな喜びを感じております。今後は更に記録を更新できるよう「チャレンジ精神」で突き進んでいきたいと思います。

大会を振り返ってみますと、これまでにない非常に苦しい試合となりました。準決勝は日本リーグ後半から調子を上げて勢いのあるトヨタ車体との対戦。前半リードはしたものの後半逆転され、ラスト30秒で追いつき、延長戦でなんとか勝利し決勝へ駒を進めることができました。流れとしては負けていてもおかしくない展開でありましたが、最後まで勝利を信じ闘った選手達はよく頑張ったと思います。決勝戦では国民体育大会で破れた湧永製薬であり、チームとしてもなんとかリベンジを果たしたく想いを一つに臨みました。試合開始早々に白選手にマンツーマンの作戦にでるなど、なかなかリズムをとらせてもらえませんでしたが、武田選手の活躍などもあり前半をリードして折り返すことができました。後半に入りDFからのFBを再度徹底し更に点差を開くことに成功しましたが、退場者をきっかけに1点を争う試合となり、また時間との闘いになりました。最後はどちらに転んでもおかしくない展開であり、冷静に時間と点差を考えならプレーを選択した選手達はまた一つ成長できたと感じております。

今大会は「幸運」にも恵まれ優勝をすることができましたが、他チームとの実力差はなく、どこが優勝しても不思議ではないと思っています。今後更に勝ち続けるためには、これまで以上の努力と多くの練習が必要だと感じてます。今の現状に満足することなく、実力を謙虚に受け止め選手一同「心技体」に磨きをかけて、今年度最後のタイトルになる日本リーグプレーオフに挑みたいと思います。今後とも大同フェニックスをよろしくお願い申し上げます。

[戦　評]

▼準決勝

湧永製薬　31（18 − 13、13 − 14）27　大崎電気

湧永製薬のスローオフで開始される。序盤は湧永製薬が主導権を握り、前半7分には7対3とする。大崎電気も猪妻の連取で追い上げを開始するが、一進一退の攻防が続き点差が縮まらない。しかし前半22分、湧永製薬は谷村の得点を機に4連取し、18対13と5点リードで前半を折り返した。

後半も湧永製薬がリードを守る展開が続く。たびたび大崎電気GK浦和の好守などから大崎電気に流れが傾くと、湧永製薬の東長濱が追加点をあげて、試合の流れを譲らない。大崎電気は、後半20分過ぎに中川のカットインで1点差に詰め寄り、23分またもや中川のミドルでついに27対27の同点に追いつく。しかし、反撃はここまで。湧永製薬は坂本、古家、武藤の連取により大崎電気を31対27で下した。湧永製薬・東長濱は、今日の試合12点を稼ぎ、大活躍であった。

大同特殊鋼　34（16 − 14、14 − 16）33　トヨタ車体
（3 − 1 延長 1 − 2）

開始直後の攻撃で車体が銘苅のステップシュートで先制すると、大同もすぐさま渡久川がポストシュートを決め、以後開始5分まで3対3と一進一退の展開になる。7分頃から、千々波をトップに据えた大同のDFを攻めあぐねた車体のミスを速攻につなげた大同が試合をリード。12分30秒、大同の3連取で5対9と4点のビハインドを背負ったところで車体がタイムアウトを請求、立て直しを図る。16分頃から登場したGK坪根を中心に車体のDFが機能し始め、さらに大同が二度に渡り退場者を出したところで車体が2点差まで詰め寄る。大同は要所での白の得点やGK高木のファインセーブでそれ以上の追い上げを許さず、16対14と大同の2点リードで前半終了。

後半、5分までに車体が鶴谷、銘苅、門山の3連取で18対17と逆転に成功。対する大同はGKのセーブや車体のミスを速攻につなげ5連取し、9分で4点をリード。しかし車体も坪根のセーブや銘苅のゴールを中心に徐々に追い上げ、27分に銘苅のミドルで30対29と抜け出す。ラスト1分、1点ビハインドで大同がタイムアウトを請求。直後の攻撃で武田が得点を決め同点に。車体も残り30秒でタイムアウトを取り逃げ切りを狙うが、この攻撃はパッシブを取られる。大同がすかさず速攻を繰り出し勝負あったかと思われたが、このシュートは枠を外れ延長戦に突入した。

延長戦、前半だけで3得点をあげた白の活躍や高木のファインセーブにより34対33で大同が車体を振り切り勝利した。

▼決勝戦

大同特殊鋼　26（14 − 11、12 − 14）25　湧永製薬

大会四連覇を目論む大同と5年ぶりの優勝を狙う湧永との決勝戦。スローオフ直後の攻撃で湧永が坂本のサイドシュートで先制。対する大同は、渡久川のポストシュートを中心にセットオフェンスで4連取し、開始5分で4対1と3点リード。その後両者ともセットオフェンスを中心に加点していき、少ない点差で推移する引き締まった展開。18分から湧永は堅固なDFから新と古家で3連取し、21分で9対7とリードする。これを受けタイムアウトを取った大同は、1点を取り合った後、武田がサイドにロングにと一人で3連取する。さらに千々波が速攻で続き26分30秒、12対10と抜け出たところで湧永がタイムアウト。湧永は古家の職人的ステップシュートで1点を返すが、大同は白、末松で得点し流れを渡さない。前半は14対11と大同の3点リードで終了。

後半は、開始から両者パスミスが続く慌ただしい幕開け。4分、湧永・武藤が獲得した7mスローを東長濱が冷静に沈める。さらに山中、福田がロングで続き3連取で6分45秒、16対16と湧永が追いつく。そこからは両チームが気迫のDFで激しくプレッシャーをかける。ここで流れをつかんだ大同が速攻を中心に20分23対18と一気に5点のリードを奪う。湧永は東長濱が7mスローのルーズボールを押し込むが、大同は直後に白ー末松のスカイプレーを決め、なおも流れを譲らない。22分にタイムアウトを請求した湧永は息を吹き返し、谷村と新で3連取。大同がたまらずタイムアウトを取るが、湧永の勢いは止まらず合計5連取で27分30秒、24対25と1点差に迫る。直後に白が個人技で中央を突破し26対24。その後もGK志水のファインセーブなどで粘る湧永を大同が振り切り26対25と1点差で辛くも逃げ切った。

写真提供・スポーツイベント社

「ドーピング検査」に係るマネージメントからの卒業（全日本総合選手権の裏側では）

西山逸成氏

西山逸成氏（日本ハンドボール協会・アドバイザー）は、この大会を最後にドーピング検査に係るアレンジ・マネージメントから卒業されることになり、この間の活動に関しお話を伺いました。

■ドーピングとの出会い

1968年のメキシコオリンピックで最初のドーピング検査が実施された。その時、氏は日本近代五種競技の強化部長・監督をされており、開会式当日の馬術競技（第1日競技）後に近代五種競技のK選手がドーピング検査に抽出された。これが、氏とアンチ・ドーピングとの出会いであり、大変なことだと痛感した。その時の検査は、尿検体がDCO不在の検査室に置きっぱなしであったり、シビアーな検査管理はなされていなかったようで、結局、全検体の検査結果は無効となった。このことを後日、紙上で知った。しかし、ミュンヘンオリンピック（1972）以降、WADAの設置（2003）など、シビアーな検査へと進展していた。

■日本で初の国際競技のドーピング検査実施…熊本世界選手権から

1997年の大会が、アンチ・ドーピング委員会（IHF/MC主管）が実施した最初の国際大会とのことで、当時は、TD（テクニカルデレゲート）とDCO（ドーピング検査官）は兼ねることとなっており、氏（AHF/MC委員長）はオフィシャル＆ドーピング検査の両面を管理する必要があった。

熊本世界選手権大会時の違反—Sチーム・Z選手にフエニルプロパノールアミン（交感神経興奮作用）の検出違反により“選手のみ大会出場3ヶ月間の出場停止”が報告された。

更に、日本国内のドーピング検査の動静では、平成8年度（1996）以降—JOC事業の一環として、競技団体主体の「大会時検査」、平成11年度（1999）以降—実施条件（規則・担当組織）を満たした1/12競技団体としてJHLプレーオフでの実施が始められた。

■検査機関の体制作り（2001年JADA（日本アンチ・ドーピング機構）の設立）

検査の結果判明までの時間は、24時間以内として次のゲームまでに結果を出す等の運用もあったが、現在は、競技が終了しても違反選手の競技結果を取り消す追認もあり、検査結果の判明は、1週間から2週間を要しているのが実態である。発足当初は検査料も、JADA 1検体3万円としていた。検査機関での検査料は、国により差はあるが、スペインでは国立検査機関が無料で実施をしていることも聞いていた。現在日本では、1検体約9万円であり、種目団体単位での検査には経済的負担上も難しく、文科省の助成のもとにおこなわれている。

■ドーピング検査対象の試合の選定

ハンドボール競技でのドーピング検査の平成21年度・対象試合数（7大会）・検体数（84）がJADA：JHAとの契約が手交されており、昨年までの全日本総合とリーグプレーオフ程度の対象試合から、今年度から84検体のレベルまで増えてきているのが実態である。

■検査の実態（全日本総合選手権大会では…）

ドーピング検査官はDCO（ドーピング・コントロール・オフィサー）を筆頭に、10数名で編成される。シャペロンと称する、選手の試合中・後の動静を観察し、検査対象選手を検査室までエスコートする役目を負った役員が6～8名、今回は、会場管理面から、ベンチの正面に左右に分かれ監視していた。シャペロンは採尿室内には入れず、DCOが対応し、採尿後はDCOを補佐し、取材や着替え等の選手のエスコートを担当する。

DCOは競技会検査・競技外検査も含め2年間に検査回数が設定されており、研修会の受講など厳しい管理が求められている。

■今後について

今大会を以って、ドーピング検査の全体をアレンジ・コントロールされる役割は終えられた。後任には、日本ハンドボール協会参事（アンチドーピング特別委員長）、IHF/MC ＆ AHF/MC委員長の坂本静男氏（早稲田大学教授）が引継いでおられます。但し、JADAのDCOとしての資格・役割については継続をされるとのことです。西山氏の精力的な行動力と、後輩への指導には敬服した次第です。ご苦労様でした。

坂本静男氏（中央）とドーピング検査班の皆さん

ユース代表 全日本総合選手権に参加

全日本総合選手権に参加して

ユース日本代表チームリーダー　志々場修二

12月16日から東京で開催されました第61回全日本総合選手権大会におきまして、大会運営に尽力されました関係者の皆様に心から感謝申し上げます。また今回、ユース日本代表チームに出場の機会を与えていただいた日本ハンドボール協会の方々にも重ねてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

現在の高校の現状に触れさせていただきます。高校生は3月に行われる全国選抜大会、8月のインターハイ、10月の国体に向けてチームを作り練習に励んできます。10月の国体は、8月中旬から下旬に行われる国体予選を通過した16ないし19チーム（隔年）のみの参加となります。したがって、大半のチーム・選手は8月に高校でのハンドボール活動を終える形になります。その後大学に進学しても、一年生から試合に出場する者も少なく、18～19歳という体力的にも技術的にも最も伸び盛りのときに試合経験を積むことができない状況にあります。将来日本代表の予備軍であるU－19の選手も夏にあるアジアユース大会（隔年）以後、代表活動はできない（予算との関係で）状況を考えると強化活動においても大きなマイナスといえる現状であります。

このような現状の中で、今回、全日本総合選手権に出場機会を与えていただいたことは、来年度のアジアジュニア・ユース両大会に向けても、強化指定選手を継続的に強化する視点においても大きな前進でありました。是非、次年度以後も継続していただきたいと思います。

監督　滝川一徳

この度、ユース日本代表が全日本総合選手権に出場する機会をあたえていただきありがとうございました。感謝いたします。

本年度ユース日本代表は、7月に行われた4月～6月に三度の合宿、そして7月のユースオリンピック予選という活動でした。本来なら年間を通して活動すべきですが、諸事情からできない現状にあります。そのような状況の中で、今回、全日本総合選手権に出場できたことは非常にユース日本代表にとってプラスでありました。大会で大学生と試合ができたことだけでなく、ユースオリンピック予選に向けて行ってきたトレーニングの確認、そして個々の選手のチェック（自チームでトレーニングを継続的に行ってきているか等）、来年度のアジア大会（ユース・ジュニア）に向けての強化を行うことができました。これはユースの選手にとって大きな経験となりました。次年度以後も継続的に行うことにより、ユース・ジュニアの年代の強化に大きくプラスになると思います。

「ユース日本代表選手」初参加から

今大会初の試みである日本協会推薦枠で出場の「ユース日本代表選手」4名に話を伺った。

- **元木博紀（藤代紫水）**：自分達のチームは海外チームとの対戦と想定していた。今回の出場決定を聞き大学生との対戦となったが、スピード、テクニックが違うので、今までに無い良い経験が出来た。今後はしっかりと体力を作って頑張って行きたい。
- **藤江恭輔（北陸）**：大学生はパワー・スピード・テクニックに優れており、自分たちにとって大変貴重な体験ができた。これからも、より一層体力つくりの大切さを実践して、頑張りたい。
- **久保二千笑（岩国工業）**：大学生のパワー・テクニックに自分のプレーが何処まで通用するのかワクワクした。これからは、スピード・パワーをつけて、上位の選手として通用する選手になりたい。
- **大倉有勲（北陸）**：代表に初めて招集され、自分のプレーが大学生に通用するのか楽しみだった。この貴重な経験を活かして、これからもハンドボールプレーヤーとして、全力で頑張っていきたい。

何れも、大学生との対戦を楽しみにしていたようである。この大会の経験を貴重な体験と捉えており、次の活動ステージでの一層の奮闘を熱く誓っていた。若い世代が、全日本総合選手権大会に出場した狙い・成果は達成されたと実感できる語りであった。

藤江選手のカットインプレー

元木選手のノータイムフリースロー（結果見事にゴールイン）

左から、元木選手・藤江選手・久保選手・大倉選手

第61回 全日本総合選手権大会 女子の部

オムロンが５年連続13回目の優勝

2点共 写真提供・スポーツイベント社

■最終順位

優勝　オムロン
２位　北國銀行
３位　ソニーセミコンダクタ九州
３位　広島メイプルレッズ

■個人表彰

最優秀選手賞　藤間かおり（オムロン）
最優秀監督賞　洪　廷昊（オムロン）

全日本総合選手権大会を終えて

香川県ハンドボール協会理事長　横山　和司

年末も押し迫った12月24日から4日間、高松市香川総合体育館で第61回全日本総合選手権大会を開催いたしました。まずは、熱戦を繰り広げられた選手の皆様、会場まで足をお運びいただいた皆様方に深く感謝いたしますとともに、この大会を開催するにあたって多大なご協力やご支援をいただいた各方面に心より御礼を申し上げます。

ご存知のとおり、この大会については12月16日より東京・駒沢にて男女大会が開催される予定でした。しかし、日本代表が出場権を獲得している女子世界選手権が開催国中国の都合で日程変更され、全日本総合選手権の日程と重なった結果、女子の大会は別日程で行うことになりましたが、東京では会場確保できず各県協会に開催の依頼が来ました。

香川県協会としては、日頃よりお世話になっている日本協会に協力するとともに、トーナメント型大会として最高位の伝統ある大会を開催し、県民の皆様がトップレベルのハンドボールに触れ、その醍醐味を味わうことのできる願ってもない機会だと考え、開催に名乗りをあげました。しかし、急遽決定した大会のため、多くの課題を抱えたままの開催準備となりました。特に全国大会を地方で開催するにあたって必要不可欠な行政からの資金援助の申請時期がすでに過ぎていたことで補助金を全く得られなかったことや、日本協会からの補助金・協賛企業よりの広告料も男子大会と出場チーム数で按分して支給されるため前年度の石川大会と比べ大幅に減少、さらに女子大会にはテレビ中継による放映権料の収入も無く、準備を進めれば進めるほど開催そのものに対する不安と、名乗りをあげたことに対する後悔を感じました。

しかし、全日本総合を香川県で成功させたい、ハンドボールの素晴らしさを地元のたくさんの人達に伝えたいという本県協会員の熱意が地元企業やハンドボールに関わった人々に伝わり、この不況下でなんとか運営できるだけの協賛金を集めることが出来ました。また、幸いにも本県協会は各種別の全国大会等で活躍する優秀な指導者やスタッフ、経験豊富な審判を抱えていることや、2006の全国中学大会、2007の全国高専大会を経験したこともあり、競技運営にはある程度の自信を協会関係者が持っていたことが、この大会を成功裏に終えることが出来た大きな要因になったと考えます。

また、大会開催を決定した3月から現在に至るまで、日本協会の兼子事務局長をはじめとする事務方の皆様の本協会に対する親身なご指導やご助言無くしては大会開催することは不可能でした。心より感謝申し上げます。香川県協会としては、この大会を成功させることが最終的な目標では無く、これを契機としてハンドボールが香川県の県民スポーツとして定着し、益々発展することを常に考え努力を続けてきたいと考えておりますので、今後ともいろいろな局面でご指導をいただければ有り難いと考えております。

また、江成競技委員長、植村審判長他、来県された日本協会の皆様の地元協会に対するご理解とご協力に深く感謝申し上げます。さらには日本リーグ機構の家永GMには、ハン

ドボールの楽しさをより多くの人達に伝えたいという我々地方協会の考えや立場を理解いただき、適切なご指導して頂いたおかげで来場された観客の皆様に喜んで頂くことが出来たと考えております。

最後に、年末・学年末の非常に忙しい時期に、何日間も職場を離れて大会運営業務に就いて頂いた本協会の役員、スタッフの皆様にお礼を申し上げるとともに、地方の日本一小さい県でも日本一の大会を開催できるという自信と誇りを持って、今後もハンドボールの発展のためにともに努力を続けていただけることを期待しています。

優勝 オムロン

写真提供・スポーツイベント社

優勝の声

オムロンハンドボール部ヘッドコーチ　洪　廷昊

日本リーグ年内最終戦が終わりナショナル活動でオムロンの選手も世界選手権の為にチームを離れ準備期間が1週間しかなく5連覇というプレッシャーと全員で練習する時間が足りなかったこともあり不安を抱えて望んだ大会であった。

その半面、選手全員とスタッフが“危機感”を持ち意思統一が図られモチベーションをあげて望めた大会でもあった。

初戦から準決勝までは、反省課題も多々あったが決勝まで駒を進めることができた。

決勝戦では前半20分過ぎにキャプテン坂元のアクシデントがありチームに大きな衝撃を与えた。

キャプテンが抜けた事で戦略的に苦しい展開になり、途中相手に3点リードを許してしまうこともあったが最後まであきらめず戦ったことで1点差で勝利でき5連覇を達成することができた。

オムロンはなかなか香川県で試合をする機会が無かったが、試合会場に多くの方々が足を運んでくださり温かい応援に後押しされ優勝することができ心から感謝しています。

今大会の開催にあたりご尽力いただいた香川県の関係者を初め、たくさんの方々にお礼を申し上げます。

この優勝に慢心することなく日本リーグプレーオフ出場を目指し取り組んでまいります。今後も温かいご声援を宜しくお願い致します。

[戦　評]

▼準決勝

オムロン　40（21 － 8、19 － 9）17　広島メイプルレッズ

準決勝第1試合は、大会5連覇を狙うオムロンに、5年振りの優勝を目指す広島メイプルレッズが挑んだ。メイプルは3－2－1ディフェンスを敷き、オムロンのポイントゲッター洪や藤井へのマークを試みたが、厚い攻撃を防ぎきることはできず、前半だけで21点の失点を許してしまった。一方、オムロンは高くて堅いディフェンスでメイプルの攻めを寄せ付けず、李の序盤のロングシュートなど8失点に抑えた。

後半に入っても、オムロンがリードする展開は変わらず、メイプルがオムロンのディフェンスを打ち崩すことができなかった。点差は徐々に広がり、終わってみれば40対17でオムロンの圧勝であった。

北國銀行　27（12 － 12、15 － 14）26　ソニーセミコンダクタ九州

立ち上がり北國はエース4番・上町のロングシュートや5番・宮前のサイドシュートなどで11分過ぎには6対3とリード。ソニーはタイムアウトを取るものの、25分過ぎまでその差は縮まらない。残り5分で北國もタイムアウトを取るが、逆にその後ソニーが11番・黒木の速攻や4番・高橋のサイドシュートなどで27分には同点に追いつき、そのまま12対12で前半を終える。

後半もお互い譲らず一進一退の攻防が20分近く続くが、ソニーは4番・高橋のサイドシュート、3番・長野のミドルシュートで2点差をつける。たまらず北國はタイムアウトを取り、その後13番・仲宗根ステップシュート、ロングシュートの2連取で残り2分には再び同点。試合を決めたのは、北國のエース上町。残り30秒、見事な技ありステップシュートを決め、27対26で北國が接戦を制した。

▼決勝

オムロン　20（8 － 10、12 － 9）19　北國銀行

大会5連覇を目指すオムロンと93年以来優勝から遠ざかり、久しぶりの王者奪還をもくろむ北國銀行との対戦。開始1分、オムロンがポスト坂元にパスを通し、確実に先取点を上げれば、その直後、北國も負けじと仲宗根のランニングシュートで応酬。その後北國は、オムロンの高くて固いディフェンスに対し、ランニングシュートやサイドシュートで粘り強く攻撃を続けるが、10分過ぎ、オムロンの速攻に北國の上町が思わず反則し、2分間の退場となる。しかし、オムロンはこの好機を十分に活かせず、北國を突き放すことができない。逆に北國は、18分過ぎに野路のミドルシュート、19分過ぎには速攻に出た中村に綺麗なパスが通り、2点を連取。たまらずオムロンはタイムアウトを取るが、その直後、ルーズボールを取りに行ったポスト坂元が負傷退場し、リズムがどうしても掴めない。27分20秒にオムロンの高田のループシュートがようやく決まったが、結局オムロンは2点差をつけられ、8対10で前半を終えた。

後半開始1分、オムロンが高田のサイドシュートで1点をあげるが、北國もセンター仲宗根のランニングシュートで取り返す。その後、点の取り合いが続くが、両ゴールキーパーのナイスセーブもあり、点差は開かず15分を経過して13対15の2点差で依然北國がリード。16分30秒、オムロンがスカイプレーで1点差に迫り、北國・横嶋の2分間退場を誘った。その1分後、セットプレーが見事に決まり、オムロンはやっと同点に追いついた。24分30秒過ぎに、北國のエース上町の素早いフェイントからのシュートが決まり、北國が1点リード。オムロンタイムアウト後の25分20秒、オムロンのセットプレーに北國の中村が思わずファール。オムロンが7mスローを確実に決め、同点。最後は長身のエース東濱が残り1分でシュートを決め、これが決勝点となり、オムロンが大会5連覇を達成した。

4点共　写真提供・スポーツイベント社

4点共　写真提供・スポーツイベント社

高松宮記念杯男子第 52 回・女子第 45 回

平成 21 年度

全日本学生ハンドボール選手権大会

男子：日本体育大学が４年連続 20 回目の優勝
女子：東京女子体育大学が８年ぶり 16 回目の優勝

総　評

北信越学生ハンドボール連盟理事長　瀧本明弘

平成 21 年度高松宮記念杯男子第 52 回・女子第 45 回全日本学生ハンドボール選手権大会は、石川県金沢市に昨年オープンした、「いしかわ総合スポーツセンター」に於いて開催されました。ここは、昨年全日本総合選手権大会が開催され、決勝戦では 6000 人の観客が、ハンドボールに酔いしれた会場です。その会場で今大会を開催できたことは、大変感慨深いものがありました。さらにこのスポーツセンターは、コートを 4 面取ることが出来るため、他の会場へ移動する必要が無いこと、また、観覧席に於いて一度体育館シューズに履き替えれば、館内全て履き替える必要が無いことなど、大変良い条件で大会を運営することが出来ました。

試合日程は、ゲーム数が多い 1、2 回戦を（土）（日）に設定して、応援に駆けつける父母や、地元の一般客が多く観戦できるように配慮しました。その結果、土日だけで、約 4000 名が観戦に訪れました。また、開会式を含む大会 6 日間を通して約 7000 名の観客動員がありました。

今大会は、学生ハンドボールの日本一を決めることはもちろんのこと、この大会を通じて、学生たちに障がい者のスポーツにも関心を持ってもらうために、「エイブルの会」の映画上映や、「スペシャルオリンピクス」等の紹介もしました。

試合は、「インカレが一番面白い」とよく耳にしますが、その言葉通りの素晴らしい内容のゲームが多くあり、関係者はもとより、初めて観た人達の中にも、ハンドボールファンが増えたことは間違いないと考えられます。特に、延長戦になった、男子の早稲田大学対大阪体育大学、女子の大阪教育大学対筑波大学戦は、手に汗握る熱戦でありました。筑波大学の、試合終了合図とほぼ同時に決まった、延長戦突入のロングシュートに、感動の余り涙ぐむ一般客の姿も見られました。

男子の優勝は、日本体育大学が 4 連覇（20 回目）を飾り、女子は東京女子体育大学が 8 年ぶり 16 回目の優勝を飾りました。

大会に先立ち挙行された、11 月 6 日（金）の開会式では、世界大会優勝者から指導を受けた、フラダンスの「勝利の舞」がアトラクションとして行われ、日本一を目指した学生たちの、熱い戦いの火蓋が切って落とされました。また、11 月 11 日（水）の閉会式・表彰式は、厳かな中にも、戦い終わった選手達の安堵感と、さわやかな気持ちが満ち溢れたものとなりました。

世界的な不況の影響で、財政的には厳しかった平成 21 年度全日本学生ハンドボール選手権大会も、無事終了することが出来ました。主催の日本ハンドボール協会、全日本学生ハンドボール連盟及びお手伝いいただいた石川県ハンドボール協会ならびに石川県高体連に厚く御礼申し上げます。最後になりましたが、学生たちのために、ご声援、ご協賛をいただきました各団体及び各企業に御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

男子優勝 日本体育大学

全日本インカレを優勝して

日本体育大学主将 石川 出

写真提供・スポーツイベント社

平成21年11月7日から11日まで石川県金沢市で行われた全日本学生選手権大会（全日本インカレ）で優勝、そして四連覇できたことを大変嬉しく思っています。同時に松井先生が日体大監督として初の四連覇の年の主将を務めさせて頂いたこともとても光栄であり、満足しています。

今年は関東学生春季・秋季リーグ戦で優勝したものの、両リーグ戦とも筑波大学に引き分けている事や、主力メンバーの怪我もあって全日本インカレに向けて不安材料もありました。もちろん四連覇というプレッシャーもあり、一年間とても苦労しました。しかし、全日本インカレで私たち日体大に絶対の自信があったのは、年間を通して走りのトレーニングを積んできたことです。他の大学には負けないくらい走り続けてきた結果、体力では負けない自信が選手間にあったのは間違いありません。

私たちは一年を通して走り込みをしてきましたが、特に印象に残っているのは春・夏合宿で何度も倒れそうになり、痛い足を我慢して引きずりながら頑張って練習をしてきたことです。今考えてみればあの苦しい走り込みをしてきたので、日体大の「走るハンドボール」が一人一人に身につき、四連覇に結びついたと思っています。優勝した瞬間は四年間の苦労が込み上げ、嬉し涙がとまりませんでした。

私は4年生最後の学年で主将を務めさせて頂き、優勝できたことをとても誇りに思っています。優勝できたのは他の4年生を始めチーム全員、ご指導してくださった松井先生、そして今日まで支えてくれた保護者の温かい応援、日体大関係者の皆さまのお陰だと思っています。後輩たちには「走るハンドボール」をこれからも継承してもらい、全日本インカレ五連覇を目指し努力を重ね精進してほしいと願っています。

女子優勝 東京女子体育大学

優勝の声

東京女子体育大学ハンドボール部部長　高野　亮

2009年11月6日より石川県金沢市で開催されました女子第45回全日本学生選手権大会で8年ぶり16回目の優勝を経験させてあげることができました。

最終日、女子決勝戦のホイッスルが鳴った瞬間の選手達のこの上ないトビッキリの笑顔に出会え…蔓延するインフルエンザの中一人の犠牲者も出すことなく、目標を共有できる仲間達47名の部員全員で喜び合えることができました。後日開催していただきました父母会主催の「祝勝会」では、8年ぶりということもあり、選手達も「インカレ優勝の祝勝会」を全く経験しておらず、どの様に喜び、会を進めていくかもよくわからず…これが又新鮮にも感じたものでした。しかしインカレが終り緊張感から解放されたのか、「祝勝会」の折には10名もがインフルエンザにかかり、欠席せざるをえなかった事が残念であり、指導者として又新たな勉強をさせられました。

学生チームは毎年、毎年メンバーが変り、選手のもつ特徴もそれぞれ違い、一人ひとりの特徴をいかに引き出しながら、戦術をつくり上げていくかが毎年の楽しみの一つではあります。又それが苦労の一つでもあるのが事実ですが、幸い今年度のチームは、昨年の全日本総合が終り新チームがスタートしましたが、ゲーム経験者が多く残り「チームの基盤」はある程度出来上がっていました。毎日の練習の中で選手が無意識にやっていることが戦術づくりの中に大きなヒントをあたえてくれることもしばしばあります。「こうはならないけれども…こういう風にはなる」となると「こういう風に」をどうやってかみ合わせてやるか、という「理想」⇒「現実」への工夫が指導者としては楽しみであります。色々な要素をいかに一年間でまとめ上げていくかが課題にもなり、そういう意味でも選手達一人ひとりが工夫を怠ることなく「目標」をはっきりもって日夜精進したこと、又今の学生は以前の学生達に比べ、長期間チームを離脱して、治療・リハビリをしなければならない怪我が多い中、幸いにして今季はこの様な怪我人がでなかったことが、今回の結果として現われたと強く感じとれました。

写真提供・スポーツイベント社

日本のハンドボール界を考えますと、何としても「オリンピック出場」が最大の課題である中、国際的に通用する選手づくりが我々にも求められております。その目標に向かい今後もチームスローガンでもある「限りなき挑戦」がもう始まりました。

戦評

【男子】

▼準決勝

日本体大　34（16－11、18－11）22　東海大

前半から日体大の得意とするスピードハンドボールが展開された。日体12番（GK）甲斐が東海大のシュートを防ぎ、CPが速攻で得点へとつなげる一方的な試合になるかと思われた。しかし、後半20分過ぎ、1番（GK）瀬尾に替わって入った東海12番（GK）太利がナイスセーブを見せ、追い上げの流れを引き寄せた。やや日体有利。後半も終始日体大ペース。東海大は日体大のDF、そしてGKを攻略することができずにいた。日体大は8番・信太の鋭いロングシュートを始め、選手全員で走りきり勝利を収めた。

筑波大　36（18－11、18－11）22　日本大

前半15分、筑波大はDFが少しずつ機能し日本大のミスを着実に得点しリードした。筑波大のDFに日大は攻め手が無くなりミスが続き、速攻で失点を重ねた。日大もセットプレーで得点するが点差を詰めることができなかった。

▼決勝

日本体大　29（13－10、16－15）25　筑波大

筑波大の先制点で始まった前半。序盤で3点連続シュートで勢いをつける筑波大だったが、日体大の逆襲が始まった。3点の差を筑波大も離さず、お互い一歩も引かないまま前半は終了した。後半は、日体大の先制点で始まり、筑波大との点差を離しにかかった。筑波大もスカイプレーを見せるなど迫力のあるプレーを展開したが、点差を縮めることができない。その後、日体大の豪快なシュートが炸裂し、日体大が4連覇（通算20回）を果たした。

【女子】

▼準決勝

東女体大　30（15－14、15－13）27　大阪体大

先制点は大体大。その後、東女体2番・稲葉を中心とした攻めで得点を重ね、ペースを握る。しかし、残り10分くらいから大体大のDFが機能し出し、お互い一歩も譲らない状況。後半10分過ぎ、東女体が3点差をつけてから試合のペースを握り始める。大体大のミスを確実にモノにし、得点を重ねたことで徐々に差を広げた。一方、大体大も相手選手の退場をきっかけに怒涛の追い上げを見せたが、最終的にミスの少なかった東女体が決勝に駒を進めた。

大阪教大　25（8－11、12－9）22　筑波大
（3－1 延長 2－1）

前半は両チーム共に立ち上がりからプレーが慌しく、筑波大はパスミスが多く、大教大はゴールバーに嫌われるなど、お互いにミスが目立った。だが、セットの攻撃で確実に得点していく筑波大が、一歩リード。試合のペースを保ちつつ後半へ。後半が始まり、26分、大教大5番・乾が決め筑波大との差を無くす。ラスト1分に大教大5番・乾が決め、大教大1点差リードになる。しかし、ラスト3秒に筑波大4番・作内が決め延長戦へ。延長前半、筑波大のシュートミスから大教大が速攻を仕掛け、2点差をつける。延長後半は、リードしている大教大に余裕が見られ、逆に筑波大の選手に焦り、そして疲れが見られた。大逆転！　大教大が筑波大を下し決勝へ。

▼決勝

東女体大　26（13－11、13－7）18　大阪教大

先制点は大教大3番増田選手が決める。大教大のミスを、東女体が速攻に繋げ、得点を重ねていった。しかし終盤、大教大は東女体のミスからの速攻で確実に得点し、点差を詰めた。後半は東女体が2点リードで迎える。後半戦は東女体の先制点で始まった。始まりは両チーム、キーパーのナイスセーブが目立った。開始10分、大教大が東女体に追いついた。しかし、そこからは、完全に東女体の流れになり、8点差の大差で東女体が勝利を掴んだ。東女体が8年ぶり16回目の優勝を手にした。

最終成績

■男子

優　勝	日本体育大学
準優勝	筑波大学
3　位	東海大学
	日本大学

■女子

優　勝	東京女子体育大学
準優勝	大阪教育大学
3　位	大阪体育大学
	筑波大学

優秀選手賞

■男子

	CP	石川出（日体大）
	GK	甲斐昭人（日体大）
	CP	信太弘樹（日体大）
	CP	小室大地（日体大）
	CP	樋口睦（筑波大）
	CP	木切倉真一（筑波大）
	CP	久保侑生（筑波大）
特別賞	CP	根本恭兵（東海大）
	GK	大畑俊輔（日本大）
優秀監督賞		松井幸嗣（日体大）

■女子

	CP	稲葉由衣（東女体）
	GK	飛弾由加里（東女体）
	CP	張素姫（東女体）
	CP	石田千帆（大教大）
	GK	石原直美（大教大）
	CP	後藤千渡世（大体大）
	CP	石野実加子（筑波大）
特別賞	CP	早川志歩（東女体）
	CP	若泉春香（大教大）
優秀監督賞		八尾泰寛（東女体）

新たな挑戦!!
(全日本学生ハンドボール選手権大会から)

今大会の運営に当たり中心的に行動されていた、大会副委員長瀧本明弘さん、大会スタッフの北信越学生ハンドボール連盟理事辻村昌之さんに運営に当たってのお話を伺うことが出来ました。

大会運営で最も苦労されたのは、大会委員・補助員などの大会役員の確保でした。特に平日の役員確保は大変厳しい状況にあり、その為事前の対応として昨年開催の全日本総合大会時に、中心となった石川県協会スタッフとして北信越学連役員も積極的に手伝ったとの事です。そして、今大会では石川県協会役員の方々にもお手伝いを戴き、大会運営を乗り切ることが出来たと言われました。大会1日目、2日目、特に試合数が多くなる日程を乗り切るために敢えて土曜日開催開始とし､土日の役員確保を容易とする為に取った施策でした。加えて、一つの会場で正式なコートが4面も確保できる「いしかわ総合スポーツセンター」は、大会運営面でも大変助かったようです。

大会に支援戴いている｢大会スポンサー｣の経済状況も捗々しくないなかで、運営費用の遣り繰りも大きな課題でした。その様な状況下でも、大会プログラムの構成には斬新な工夫が施され、一見すると雑誌と見間違うほどのデザイン性に富んだ内容となっており、読み手側からの目線での大会プログラムとなっています。

今大会のコンセプトは……新たな挑戦として

【学生にはもっとパワーがあり、大きな可能性があるのではないか？】
【大会を通じて、学生に伝えることはないのか？】
【学生に出来ることがあるのではないか？】
そこで今回、日本が遅れているとされる「障がい者スポーツ」に着目し、スポーツを通じて学生が何を見、何を聞き、何を想いどのような事が表現できるか、学生の可能性を見出したい。

この具体化が、「認定ＮＰＯ法人　スペシャルオリンピックス日本」(知的発達障がいのある人達にさまざまなスポーツトレーニングと、その成果の発表の場である競技会を、年間を通じて提供している国際的なスポーツ組織）とのコラボレーションでした。大会では、「スペシャルオリンピックス」の認知度を向上させること、理解してもらうこと、更には知ってもらうために、開会式で関連のパンフレットを配布し、開会式終了後のアンケート回答では、９割以上の方が「スペシャルオリンピックス」を理解できたとの回答がありました。又、開会式でのエキシビジョンとして、スペシャルオリンピックスの競技の中で最も人気が有り、競技人口が最も多い「フロアホッケー」を開催しアピールを図りました。大会期間中は会場内に設置の特設シアターにて、「able の会」が配給するドキュメンタリー映画（知的発達障がいのある方でも、チャンスさえあればなんでも出来るようになること、彼らの可能性（エイブル）が証明されている）の､｢able｣･｢Host Town｣・｢Believe｣ の３作を上映していました。正に、学生スポーツと障がい者スポーツが大会を通じて相互に協力・協調し、学生が持つ力の可能性を広げ、未来へつながる大会としての新たな挑戦へのスタートでした。このような新たな試みが、今大会を基点としてハンドボール界全体に広がる足掛かりとなり、ハンドボールの一層の発展に貢献できるであろうと期待させる大会運営でした。

大会副委員長瀧本明弘さん（左)、北信越学生ハンドボール連盟理事辻村昌之さん（右）

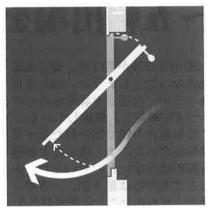
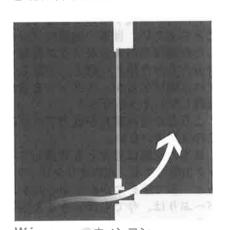
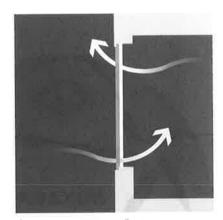
会場入口に掲げられた大会コンセプト：「学生スポーツ」×「障がい者スポーツ」学生の可能性を広げ、「未来へ繋がる大会」の横断幕

アンチ・ドーピング　大会に見るドーピング検査の実態

尿検体に関する競技会ドーピング検査：試合終了10分前に検査対象選手の抽選工程（チーム役員がくじを引く：１名抽出)

ドーピング検査を受けるため、試合終了後直ちに抽出選手の確認工程

ジャベロン（エスコート）の同行によりドーピング検査所に直行、そして検査が実施される…徹底した運営の実態を目の当たりにした。

呼吸する建築

Swindow●スウィンドウ
わずかな風圧も捉えて自然に開閉し、室内外の温度差で効率の良い換気が行えるバランス式逆流防止窓。

Wincon●ウィンコン
内蔵の調節弁により、風の強弱に影響を受けにくく、定風量で換気が行えるヨコ型定風量換気スリット。

Cavcon●キャブコン
内蔵の調節弁により、強風時でも一定の風量で換気ができ、無風時でも内外の温度差による重力換気が行えるタテ型定風量換気スリット。

NAV WINDOW 21

「呼吸する建築」。それは人が呼吸をするように
建築が自然に空気を取り入れ、建物内部の空気を新鮮に保ち
不要なものを排出するシステムを持つことです。
自然換気システム＝NAV WINDOW 21は
これまでの建築の機械空調と共存し
建物を取り囲む風を読み、建物内に風の道を作りそれを状況の変化に
あわせて制御する画期的な換気システムです。

三協立山アルミ株式会社
東京本社／〒164-8503 東京都中野区中央1-38-1
住友中野坂上ビル20F〈環境商品部〉 TEL (03) 5348-0367
インターネットホームページ http://buildingsash.net/

～五輪出場を正夢に～

企画・広報委員
早川　文司

2010年の幕が明けた。皆さんはどんな初夢をご覧になったでしょうか。09年を振り返って喜びもあったが、反省点や課題もあったことでしょう。一つずつ継続し、解決していくことが大事だ。

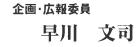
昨年暮れ中国で開かれた女子世界選手権で日本は16位だった。よく戦ったと評価するか、やはり世界の壁は厚いとの思いを抱くか。評価が分かれるところだとは思うが、一方で「1点の重み」を痛感させられたことは事実だろう。

欲を言えば予選リーグで3位に入り、上位リーグ進出ができれば最高だったが、ここでも最終戦を落としあと一歩で涙を飲んだ。

しかし、悲観するのではなく、すべてを前向きにとらえたい。世界の強豪のプレーを知り、対戦した経験は相当大きなプラス材料であるはずだ。自分たちが今後どう鍛え、不足している点をどうすれば伸ばせるか、スタッフを含め真剣に考え、実践していくべきだろう。

こうした積み重ねが戦力アップにつながっていくのは間違いない。

日本の悲願は男女とも共通している。オリンピック出場である。北京オリンピック予選やり直しは、あと一歩で夢をつかめなかったが、あの大フィーバーぶりは、今でもはっきりと脳裏に焼きついている。

出場が実現すれば、それ以上の盛り上がりになることは、容易に想像できる。12年のロンドン・オリンピックは遠いようで、すぐそこに迫っている。予選へ向けての時間はない。またも中東の笛が話題に上るかも知れないが、それを許さない実力をつけることが重要だ。

悲願を実現させるためには、球界挙げてのバックアップは欠かせないが、さらには国内スケジュールを少々犠牲にしても、強化策を講じることも必要ではないだろうか。強豪との強化試合を数多くこなして戦力アップするなど、できる限りの応援プランを早々に練り上げたい。

ワンプレーの重み、1点の重みは、やはり実戦を通して身につけていくしかないだろう。選手には日ごろの心構えも大きなウエートを占める。目指すは「12年ロンドン」を肝に銘じて、生活のすべてを“ボール”に託す強い気持ちを持続することだろう。その先にあるのは、感動、感激というでっかいプレゼントだ。

新年に当たって「一極集中」でトレーニングに励み、長年の夢が正夢になることを願っている。

第7回車椅子ハンドボール競技大会

宮城フェニックス（宮城）が6度目の優勝を飾る

【戦　評】

■準決勝

宮城フェニックス（宮城）　29（16－11、13－12）23　近畿医療福祉大（兵庫）

立ち上がりは近福大のディフェンスは堅く、一進一退の攻防が続いた。宮城はポストへのロングパスなどを有効に使いリードを広げた。しかし、近福大はシュートミスを連発し、前半、５点のリードを許して折り返した。後半は宮城の多彩な攻撃を断ち切ることができず、６点差と大きくリードを許し、一方的に宮城が勝利をおさめた。（清滝保雄）

ドリーマーズ（京都）　26（14－５、12－５）10　京都伏見sparrows（京都）

ドリーマーズのロングシュート、ポストシュートが目立ち、さらに速攻を織り込んだベテランらしい攻防はドリーマーズの特徴をよく発揮していた。京都も執拗に対抗したが決定打に欠け、点差は以外に縮まらず、健闘したが惜しまれる。（木野卓也）

■３位決定戦

近畿医療福祉大（兵庫）　35（15－６、20－３）９　京都伏見sparrows（京都）

近福大は前半立ち上がり、ポストシュートとミドルシュートが決まり、開始４分で４対０とリードした。京都は近福大の帰陣の速いディフェンスに阻まれ得点できず。一方、近福大は、池田、本田の両コンビを生かして着々と得点、前半を15対６と大きくリードした。

後半も近福大はマンツーマンディフェンスで相手のミス、パスカットの速攻から若松のポストにつなぎ得点を重ね、京都を寄せつけず35対９と大勝した。近福大は終始リードを保って３位を確保したのは見事であった。（林　孝信）

■決勝

宮城フェニックス（宮城）　27（12－８、15－９）17　ドリーマーズ（京都）

前半立ち上がり、宮城は下田のポストシュートで２点を連取して豪快さを見せた。一方、ドリーマーズはポスト山本にボールを集め、シュートチャンスを狙ったが、宮城GK勝又の好セーブで阻まれる。３分には宮城・真下が強引なシュートで得点し、中盤は互角の攻防を重ねたが、熊倉のポストシュートが決まって試合が動いた。

後半は、さすがに宮城のエース下田の得点と熊田の巧妙なパスワークから点差が開き始め、宮城の実力に圧倒された。ドリーマーズは11分にタイムアウトをとり、最後の攻撃に望みをかけたが、逆にあせりのミスから失点を重ね、反撃の芽を封じ込まれた。宮城の下田・熊倉とGK勝又の攻守に、ドリーマーズの夢は破れたが、シュートとそのタイミングに来期を期待したい。（林　孝信）

【総　評】

大会会長　小西　博喜

この大会も第７回を迎えて、常勝宮城の６度目の優勝なるか、打倒宮城でどこが阻止できるかが課題になってきた。

今回は新しく、小・中学生とあわせてファミリーの皆さんの参加を呼びかけ、年齢不問、男女を問わず、フレンドリーの部としてスタートしたのは娯楽ゲームとしてよかった。

岩出女子チームには中・高年者４名（中見・高田・いずれも40歳代）と岩出男子には上野・栗原の40歳代を加え、家族的な遊びを中心にゲームを楽しんだ。上半身の腕の使いこなしは問題なく、車椅子の操作も何とか基本動作をマスターして、ゲームには支障がなかった。また、ボールがやわらかいこともよかった。今後、高年齢者が増えてくるOB、OG連の参加を歓迎したい。

競技の部は、宮城の練習量とベテランの予測プレーに磨きがかかり、車椅子操作の位置取りと、上半身のこなし方がさらに技術を高めていくように思われる。わずかなフェイント動作の後にくるシュートへのコース選択、ボールスピードのコントロールなどに磨きがかかってきているようだ。学生チームは単発的なスピードはあるが「巧妙さ」のテクニックがやや欠ける点で得点にならないのが残念だ。連携した柔軟さの技術が、幅広い豪快なシュートの前に必要であり、相手の意表をつくプレーにもつながる研究をさらに進めてほしい。

その意味では、試合全体を通じて６人の個人技を充分に生かしながら、次のシュートプレーに生かそうとするヒラメキ、バランスの取れている宮城の勝利には一日の長を認めたい。本大会を通じて、各チームのレベルは向上しているが、ますます素早いパスワークと素早いシュートが出来る能力を期待したい。

機関誌専門委員が第7回日本車椅子ハンドボール競技大会へ赴き、連盟役員諸氏から様々なお話を伺ってきた。ハンドボール関係者にとって近いようで遠い、車椅子ハンドボール。その実態の一端でも読者に伝えることができれば、本稿の目的は一応達成される。

車椅子ハンドボールの魅力

ハンドボールならではの激しい接触はここでも健在である。ライン際でのポジション争いなどで車椅子同士が衝突する音がコートサイドまで聞こえてくる。この点について障害者の側から、接触に関する規制が「過保護ではないか。物足りない」という意見が出ているらしい。

間口の広さも車椅子ハンドボールの魅力である。大会パンフレットの出場チーム欄を見ると、老若男女に障害の有無が加わり多彩な選手が集っていることが分かる。こと体力においては健常者の若い男性が優れる。ただ、障害者にも車椅子のフットワーク（操作）においては一日の長があるという。女性のゴールシーンもしばしば見られたし、若人と中年とのマッチアップにも見応えがあった。これほど幅広い年齢層の男女、障害者と健常者が同じコートの上で競い合える競技はそうそうないだろう。

課　題

①競技人口の少なさ

「ハンドボール」それも「車椅子」という二重の絞りがかかるため、競技者が少ない。また、競技には専用の車椅子（ハの字型車輪）が使用されるが、これは一台25万円前後もするため、競技人口増の歯止めとなっている。つまり試合の機会を得ることが困難である。そもそも車椅子ハンドボールという競技がハンドボール界においてさえ認知されていないことも大問題であるという向きもある。

②広報活動を行える状況ではない

大会運営は車椅子ハンドボール連盟が担当するが、連盟は人手不足・資金不足という現実に頭を悩ませている。このご時世に資金源たる寄付金・広告費は簡単には集まらない。また、連盟役員は本業で忙殺されており広告を集める時間を確保できない。結果として大会を運営するだけで手一杯、普及活動まで手が回らない状況に陥っているという。

ちなみに、ヨーロッパハンドボール連盟（EHF）は人材・情報発信（広報用DVDやホームページの作成など）の面において強大なバックアップを行っているという。

③統一ルールの不存在

欧州と日本では、同じ競技でありながらルールに大きな相違が見られる。例えば、欧州では七人制のハンドボールと同じサイズのコートで競技が行われるが、日本のコートは縦28メートル・横15メートルである（日本国内でも大会によって異なることもある）。また、使用するボールも異なる。日本では柔らかなボール（いわゆるソフティボール）が使用されるが、欧州ではより硬いボールが使用されるという。ゴールやゴールエリアの大きさにも差異がある（いずれも欧州の方が大きい）。

車椅子ハンドボールの今後

国際的には、パラリンピックの正式種目入りを目指す積極的な動きがある。正式種目として採用されれば、日本としては当然本大会出場を目指す構えだ。

先般、EHFから日本連盟に対し日本国内の車椅子ハンドボールの現状に関する問い合わせがあったということから、近く国際大会が催されるのではないかと推測されている。

国際事情はさておき、上述のように日本の車椅子ハンドボールは幾つかの問題を抱えている。連盟内では「競技の存続自体が危うい」という認識さえなされている。他方で、「時間を捻出して大会に向けて腕を磨いている愛好者がいる以上、彼らからプレーをする機会を奪うことはできない。だから言い訳はしていられない」という前向きな発言があった。スポーツを支える情熱の源泉を見た気がした。

第７回ハンドボールコーチング研究会

平成 21 年 3 月 14 日・15 日の両日、駒澤大学において、第７回ハンドボールコーチング研究会が開催されました。本研究会は、全国指導者が自身の経験や知見を持ち寄り、実際の現場で有用な情報を共有する機会として位置付けられています。
研究会の発表内容については、本誌で連載報告していただく運びとなりました。
今月は下川真良さん（朝日大学）の発表内容「サイドシュートの研究」を報告させていただきます。なお、他の発表については次号以降で報告を連載いたします。

(財)日本ハンドボール協会指導委員会研究部会　舎利弗　学（学校法人松韻学園福島高等学校）

ハンドボールにおけるサイドシュートの研究

下川真良（朝日大学）　杉森弘幸（岐阜大学）　森　瑛介（岐阜大学大学院）　河野公昭（やまが整形外科）

キーワード：ハンドボール、サイドシュート、運動経過

Ⅰ．研究目的

ハンドボールにおけるサイドシュートは、攻撃の巾を広げるだけでなく、GK に大きなプレッシャーを与え、時にはゲームの流れを左右する重要なシュート技術の一つである。

大学生を指導している中で、ほとんどの選手が特別にサイドシュートの指導を受けていないことがわかった。また筆者自身も結果を要求し、選手に必要なシュートのイメージやコツを適切に与えられていないと感じてきた。

そこで、今回は筆者自身が身につけ、形成してきたサイドシュートの運動経過やコツについて、事後的内省により整理した上で、サイドシュート指導の基礎資料を得ることを目的とした。

Ⅱ．方法

1．研究対象：下川　真良

湧永製薬ハンドボール部にて 9 年間プレーをし、日本リーグにて 4 回ベストセブンに選出された。歴代通算得点ランキング（第 32 回大会まで）509/798 得点 21 位、歴代通算フィールドゴールランキング 509/798 得点 10 位シュート確率 0.638。全日本選手として世界選手権出場。

2．研究方法

①シュート観察資料として 2007 ～ 2008 年度、日本リーグ・全日本総合選手権大会・実業団選手権大会・国民体育大会など元湧永製薬下川 真良の VTR 観察資料とする。

②①の VTR 整理
- ・全シュート確率・サイドシュート確率
- ・サイドシュートの歩数

③局面の区別と主観的説明

④シュートバリエーションの種類

Ⅲ．結果と考察

1．筆者自身の経験（サイドプレーヤーとして）

筆者はサイドとして約 12 年間プレーした。サイドをやり始めた大学時代は、スピードとジャンプ力に自信はあったが、サイドから走り込ませてくれる余裕もなく、ぶつかられて体勢を崩すことが多かった。この頃のサイドシュートは決め打ちが多く、サイドシューターとしての仕事は殆どできず走っているだけといった感覚であった。

大学まではなんとかできていたが、実業団では上手く行かずサイドに何が必要かと考え始め本当のサイドプレーヤーになったと思う。

2．サイドシュートの基本（運動経過）

「サイドシュートを決める」がもちろん最終的に大事なことだと思うが、決めるという結果を出すためには沢山の大事なことがあると考えます。図 1 はサイドシュートの運動経過を示したものです。

図1　サイドシュートの運動経過

まず、「待ち」や「受け」の局面はバックプレーヤーとのアイコンタクト、サインの取り決めをする、ゴールキーパー（以下、GK）に対しての予備知識を持っておくこと。このGKに対しての予備知識とは、ウォーミングアップや他の選手が打っているシュートを観察し、GKの特徴や癖などをあらかじめ掴んでおくことです。

「跳び込み」局面では、歩数を減らすことによって、ディフェンスとの接触も避けられ、GKに良い位置取り（準備）をさせなくできるので0歩又は1歩で跳び込むタイミングを身に付けた方がよいと思います。

筆者自身は右脚で跳ぶのが主でしたが、有効性としてラインに沿って脚を出すのでラインクロスが減少する。右脚で跳ぶことによって右脚を払われたり、押さえつけられることがない、ショルダーチャージがやりやすいなどがあげられます。

跳び込む方向は、スペースやGKの特性、持ち込むシュート体勢によって様々です。基本的に「7ｍラインに向かって」とあるが、「垂直方向に跳ぶことや前方向に跳ぶこと」なども効果的です。

「リリース」局面では、よく手と脚から一番遠いので「ワキの下を打ちなさい」と言われる。もちろんそれもあるが「手を下げ、脚を上げたらGKのお腹がへこんでボール半個分のスペースができるから」と付け加えると選手は納得し、なるほどと思うかもしれません。

また、我が国のサイドプレーヤーは小さい選手がほとんどです。したがってワキ下を狙いたいが腕のリーチに余裕がないことが多い。私もそのうちの一人でした。シュートを決める為には、GKの癖を知り、GKの体勢を全体的に捉えるようにして見抜き、予測し、目・首・肩・肘・手首・指先などあらゆる部位を使いフェイントやシュートに活かして沢山のシュートバリエーションを身に付ける必要があると考えます。

3．シュートバリエーション

まず、ボールの持ち方として基本的に「手を大きく開いた状態から親指と小指でしっかり握り、掌とボールに少し空間をあける感じ」と習いますが、「親指以外の四指を揃えるようにして握る方法」も手首の利きを良くする方法として技術の一つになると考えます。

シュートバリエーションを増やすのに一番良い方法は、憧れの選手や上手な選手をモデルに真似てみることだと思います。映像を活用しスロー再生などから、どういった肩や肘・手首の使い方をしているのか分析すること。また、どのようなシュートがGKからして嫌なのか意見交換することも大事だと考えます。特に、ここで重要になるのが体幹や基礎体力をしっかり身に付けないとバランスの悪いシュートになりかねません。

4．まとめ

サイドはシュートポジションやプレー状況が特殊なポジションです。バックプレーヤーからのパスを待っている状態が多く感じられますが、その待ちの間にも確率を上げる為に沢山の準備をすることを怠ってはいけません。

そして指導するときには、なぜこの動き、このシュートが有効なのか、GKを動かせる為にはどのようにしたらよいかを考え、理解させておくこともトレーニングと同様に重要だと考えます。

全国大会を吹笛して

青森県ハンドボール協会　荒尾 祐治（青森県立野辺地高等学校）
櫻庭 正明（青森県立三本木高等学校）

『第64回トキめき新潟国体』が新潟県柏崎市を中心に10月2日から6日まで盛大に開催されました。ブロック大会を勝ち抜いてこられたチームだけあり大変レベルの高い今大会に、全国大会を吹笛するのは私たち（荒尾【初】、櫻庭【２回目】）にとって経験も少なく、大変緊張しながら大会に臨みました。

大会前日の審判講習会では、筆記試験と植村彰審判長からの講義をいただき、その中で『平成21年度審判員の目標』について確認がなされました。

本大会では、我々東北ブロックで幾度と無くご指導していただいている中館・多田ペア、国際審判員の濱田、小笠原ペアをはじめとする全国から選出された審判員のレフェリングを間近に観ることができたことが貴重な経験となりました。我々ペアは成年男子を１試合、少年女子を４試合吹笛する機会をいただきました。特に４日目の少年女子の準決勝に吹笛することを知らされたときには、驚きとともに緊張が一気に高まった思いは今後一生忘れることのない思い出となりました。試合を重ねるごとにアドバイスをいただいて二人の呼吸もあってくるように感じました。

今回審判ミーティングのみならず様々な場面において、試合を通し一貫性を持ち判定基準を一定にすること、早まってプレーを中断することのないようアドバンテージを見ていこう、プレーの予測をすること、段階的罰則の適用など審判員の方々から多くのご指導いただいたことが大きな財産となりました。またこの他に、若い審判員は素直に聞き入れる耳をもっており上達が早い、早くからたくさん経験を積んだ方がよい、レフェリー（ペアで）の服装統一、ジェスチャー、審判団はチームであるということなど、地元県内では話を聞く機会がないお話を聞けて大変勉強になりました。そして何より印象に残っていることは「うまいレフェリーの立ち振る舞いをよく見ることが大切」ということです。どうしてもゲームを見ていると個々のジャッジに目がいってしまいます。しかし、「ゲーム全体をどうコントロールしているのかを見ることが大切である」と教えられました。今回の貴重な経験を生かして自分達のみならず県内審判員、選手の指導に役立てて参りたいと思います。

最後に、越田審判審査指導委員長、植村審判長、阿部羅副審判長をはじめ、審判員として参加させていただく機会を与えてくださった関係者、審判団、地元新潟県大会関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

協会だより

平成21年度 第2回理事会

日　時：平成21年11月14日（土）
13：30～16：30
場　所：味の素ナショナルトレーニングセンター研修室3・4
出席者（敬称略、名簿順）：
理事：渡邊佳英、市原則之、多田　博、川上憲太、高村誠一、伊藤宏幸、角　紘昭、西窪勝広、大橋則一、志々場修二、植村　彰、松井幸嗣、稲生　茂、城川俊久、山本　一
以上15名
監事：塩川安賢、荘林康次、高田日呂美
以上3名
特任副会長：山下　泉、川上整司　以上2名
参事：石塚廣一、高山重雄、杉本眞一、前川和三、佐藤公美、佐藤喜一、中野利一、近久紀人、大村　久、佐久間克彦、藤森　徹、兼子　真　以上12名
欠席者（敬称略、名簿順）：
理事：江成元伸、蒲生晴明、田中　茂、工藤雄三、河先　修（委任状提出有り）
（事務局）床尾

以上、出席理事15名、委任状出席5名、出席監事3名、出席特任副会長2名、出席参事12名、事務局1名

〈理事会成立の確認〉

本理事会が理事定数20名、出席15名、書面委任5名であり、財団法人日本ハンドボール協会寄附行為第26条に定められた3分2以上の出席のため、本理事会が成立していることが報告された。

次に議長の選出が行われ、寄附行為第25条、第3項に基づき、渡邊会長が議長となった。

■渡邊会長より挨拶

5月に、カイロで開催のIHF総会に出席した。会長選挙では現会長への対抗馬として欧州メンバーが立候補したが結果は現会長が圧勝した。12月の中国での世界選手権開催時に、IHF理事会が開催されるが、予てからの日本の主張であるが、来るべきアジア選手権でのIHF管理下での運営を提起する予定である。

豊田での再予選以降、ハンドボールの露出度は上がっている。インターハイ・国体でも若くて背の高い選手が多く見られてきている。ナショナルチームも悲願のオリンピック出場を達成しましょう。

〈議事録署名人の選出〉

続いて、渡邊議長より議事録署名人の指名が行われ、議長、川上憲太専務理事、志々場修二常務理事、松井幸嗣理事が指名され、満場一致で承認された。

議事進行は､審議事項より行うこととした。

審議事項

1．2009年日本スポーツ賞推薦者について

伊藤総務担当常務理事より、2009年日本スポーツ賞候補者について、表彰委員会での候補者選考が説明され、審議の結果、宮﨑大輔選手にすることで､本件は可決承認された。

報告事項

1．日本協会の事業活動と課題について

川上専務より、次年度社会人連盟の発足に向けて2月の理事会で承認を受けるよう進めること、日本リーグの新ディビジョン、財政は非常に厳しいが知恵を出して進めることなどについての説明があった。

2．強化（日本代表チーム、ユースエリート変更など）ついて

西窪常務理事より、12月の女子世界選手権・2月の男子アジア選手権に向けて体力の育成強化に取組みをしていること、ジュニアアカデミーでは月1回の合宿運営を実現していること、ユースエリートのメンバー変更などについて、説明があった。

3．平成22年度事業計画・予算策定及び平成21年度第二次補正予算について

伊藤常務理事より、策定予定日程と平成21年度中間決算報告（10/31現在）により事業計画･予算の承認を2月に予定、及び21年度中間決算について説明があった。市原副会長より、強化費用の予算と実績での乖離が大きい事の指摘があり、予定をきちんと精査するよう意見が合った。

4．スポーツ振興くじ・基金助成金について

伊藤常務理事より、くじ助成・基金助成の事業について説明があった。

5．平成21・22年度会議日程案について

伊藤常務理事より、日程について説明があった。

6．公益財団法人移行申請について

伊藤常務理事より、説明があった。市原副会長より、公益･一般の選択含め、JOCの法人化の動きを見て検討するのが良いのではとの意見が合った。

7．国際大会・行事スケジュール他について

伊藤常務理事より、今後の国際大会及び行事スケジュール説明があった。

8．平成21・22年度国内・国際大会日程について

兼子事務局長より、平成21年度残りの大会と、平成22年度の現時点での大会予定について説明があった。

9．社会人連盟（仮称）について

川上専務理事より、次年度は大きな変更はしない、新連盟を3月に立ち上げる予定であるなどの説明があった。

10．平成21年度全国理事長会議について

川上専務理事より、説明があった。

11．ビーチハンドボールについて

角常務理事より、説明があった。

多田副会長より、世界はレクリエーションから競技性の方向性が明確であり、日本も本格的な対応を図る必要があるとの意見があった。

12．日本リーグ報告

高村常務理事より、リーグの状況、第1回チャレンジディビジョン状況、及びJHL女子チャレンジリーグ開催について説明があった。

13．感謝の集い、界友会等について

大橋常務理事より、説明があった。多田副会長より、WOWWOWでは、ハンドボール関連の放映が多々ある。此れを機に加入もして戴きたいとの意見もあった。又、市原副会長より、広報委員会の一層の充実についての意見が合った。

14．がんばれハンドボール20万人会について

中野参事より、会員への確認をとって規約の改正をする予定であるなどの説明があった。市原副会長より、特別法人会員の特典の質問があり、後日明確にするとの回答があった。又、多田副会長から、20万人へのアプローチは重要な課題であるとの指摘があった。

15．A・B級審査報告、競技規則変更、審判員育成について

植村常務理事より、説明があった。A級B級審査では受験者の書類の不備による不合格があった。又、国際シンポジウムで行われたルール改正の説明と報告が詳細にあった。日本は、平成22年度4月実施を目指している。

16．その他

山本理事より、国体で熊本（オムロン）の4戦のうち3戦を同じ審判員が担当したのは公平性に欠けるのではないかと見られる可能性があるので避けるべきではないか。これに対し、植村審判長より良い試合は良い審判を付けるべきと自身の責任において判断したと回答があった。

予定していた議案について全て終了したので、16時20分に平成21年度第2回理事会は閉会した。

スコアールーム ①

高松宮記念杯男子52回・女子45回全日本学生選手権大会

開催期日：2009年11月7日(土)～11日(水)
会　場：石川県金沢市・いしかわ総合スポーツセンター

【男　子】

▼ 1回戦

日本体大　40（20－15、20－10）25　大同大
明治大　30（13－12、17－15）27　同志社大
東北福祉大　24（7－11、17－12）23　福岡大
関西学院大　33（16－12、17－15）27　函館大
東海大　37（20－13、17－16）29　京都産大
高松大　39（14－11、25－15）26　信州大
中部大　36（18－8、18－15）23　大東文化大
中京大　27（19－8、8－14）22　関東学院大
筑波大　27（13－11、14－15）26　桃山学院大
福岡教大　33（15－9、18－12）21　金沢大
中央大　29（13－13、16－9）22　名城大
国士舘大　32（18－8、14－13）21　大阪経大
日本大　31（19－9、12－12）21　福岡国際大
法政大　32（18－18、14－13）31　愛知大
早稲田大　21（11－8、10－9）17　関西大
大阪体大　33（12－9、21－10）19　東北学院大

▼ 2回戦

日本体大　32（15－12、17－9）21　明治大
関西学院大　30（19－13、11－16）29　東北福祉大
東海大　37（17－10、20－16）26　高松大
中京大　31（14－10、17－8）18　中部大
筑波大　39（19－7、20－10）17　福岡教大
中央大　21（9－10、12－10）20　国士舘大
日本大　31（15－15、16－13）28　法政大
大阪体大　35（16－12、13－17）33　早稲田大
（3－2　延長　3－2）

▼ 3回戦

日本体大　38（18－8、20－13）21　関西学院大
東海大　30（14－16、16－12）28　中京大
筑波大　32（13－9、19－13）22　中央大
日本大　27（13－10、14－14）24　大阪体大

▼ 準決勝

日本体大　34（16－11、18－11）22　東海大
筑波大　36（18－11、18－11）22　日本大

▼ 決勝

日本体大　29（13－10、16－15）25　筑波大

【女　子】

▼ 1回戦

国士舘大　30（19－4、11－9）13　名古屋文大
関西大　30（12－7、18－12）19　富山国際大
福岡教大　36（13－12、23－10）22　東北福祉大
早稲田大　33（14－9、19－7）16　愛媛女短大
富士大　24（9－13、15－10）23　中京大
日女体大　26（12－9、14－13）22　環太平洋大
茨城大　25（14－6、11－4）10　沖縄国際大
立命館大　41（19－7、22－6）13　北星学園大

▼ 2回戦

東女体大　35（17－7、18－9）16　国士舘大
関西大　16（8－7、8－5）12　福岡大
日本体大　28（15－11、13－14）25　福岡教大
大阪体大　34（16－9、18－10）19　早稲田大
筑波大　39（19－8、20－9）17　富士大
武庫川女大　33（13－13、20－12）25　日女体大
東海大　25（14－6、11－17）23　茨城大
大阪教大　37（19－8、18－4）12　立命館大

▼ 3回戦

東女体大　33（16－6、17－6）12　関西大
大阪体大　28（11－12、17－11）23　日本体大
筑波大　25（18－12、7－11）23　武庫川女大
大阪教大　36（16－10、20－11）21　東海大

▼ 準決勝

東女体大　30（15－14、15－13）27　大阪体大
大阪教大　25（8－11、12－9）22　筑波大
（3－1　延長　2－1）

▼ 決勝

東女体大　26（13－11、13－7）18　大阪教大

スコアルーム ②
第7回日本車椅子ハンドボール競技大会

開催期日：2009年11月21日（土）～22日（日）
会　場：和歌山県和歌山市・和歌山県立体育館

▼予選リーグAブロック

宮城フェニックス	36－17	大阪体育大学
宮城フェニックス	32－5	川崎医療福祉大学
大阪体育大学	19－9	川崎医療福祉大学

▼予選リーグBブロック

近畿医療福祉大学	25－12	京都伏見sparrows
近畿医療福祉大学	28－14	わかやま
京都伏見sparrows	22－13	わかやま

▼予選リーグCブロック

ドリーマーズ	39－3	パッチワーク徳島
ドリーマーズ	25－23	WSSK
WSSK	42－3	パッチワーク徳島

▼1回戦

近畿医療福祉大学	28－14	WSSK
京都伏見sparrows	18－11	大阪体育大学

▼準決勝

宮城フェニックス	29－23	近畿医療福祉大学
ドリーマーズ	26－10	京都伏見sparrows

▼3位決定戦

近畿医療福祉大学	35－9	京都伏見sparrows

▼決　勝

宮城フェニックス	27－17	ドリーマーズ

▼フレンドリーの部決勝

岩出ハンド教室男子	17－5	岩出ハンド教室女子

スコアルーム ③
第61回全日本総合選手権大会（男子の部）

開催期日：2009年12月16日（水）～20日（日）
会　場：東京都・駒沢体育館

▼1回戦

東海大学	31（15－14、16－14）28	三重ホンダクラブ
筑波大学	30（12－10、18－15）25	ユース日本代表
日本体育大学	30（15－7、9－17）25 （3－0　延長　3－1）	FOG
Honda	28（13－15、15－12）27	日本大学

▼2回戦

豊田合成	29（13－14、16－10）24	東海大学
トヨタ紡織九州	32（13－14、19－17）31	筑波大学
日本体育大学	31（15－19、16－11）30	北陸電力
琉球コラソン	30（12－9、18－13）22	Honda

▼準々決勝

大同特殊鋼	36（18－8、18－13）21	豊田合成
トヨタ車体	30（19－12、11－14）26	トヨタ紡織九州
湧永製薬	35（17－11、18－12）23	日本体育大学
大崎電気	31（17－7、14－11）18	琉球コラソン

▼準決勝

大同特殊鋼	34（16－14、14－16）33 （3－1　延長　1－2）	トヨタ車体
湧永製薬	31（18－13、13－14）27	大崎電気

▼決　勝

大同特殊鋼	26（14－11、12－14）25	湧永製薬

スコアルーム ④
第61回全日本総合選手権大会（女子の部）

開催期日：2009年12月24日（木）～27日（日）
会　場：香川県高松市・香川総合体育館

▼1回戦

大阪体育大学	26（12－10、14－5）15	HC.TSUKUBA
三重バイオレットアイリス	26（14－14、12－7）21	東京女子体育大学
大阪教育大学	22（8－11、14－9）20	HC名古屋
香川銀行T・H	33（14－7、19－13）20	ユース日本代表

▼2回戦

オムロン	30（16－6、14－5）11	大阪教育大学
広島メイプルレッズ	28（13－11、15－13）24	三重バイオレットアイリス
ソニーセミコンダクタ九州	42（22－12、20－9）21	大阪体育大学
北國銀行	23（10－10、13－6）16	香川銀行T・H

▼準決勝

オムロン	40（21－8、19－9）17	広島メイプルレッズ
北國銀行	27（12－12、15－14）26	ソニーセミコンダクタ九州

▼決　勝

オムロン	20（8－10、12－9）19	北國銀行

がんばれハンドボール10万人会「サポート会員」11・12月入会・継続会員

【北海道】畑中 裕【栃 木】坂本定芳【群 馬】高橋 潔【埼 玉】齋藤和也、浅川仁美、松本英之、岡村昭二【東 京】嵩 聰久、仁平好則、青山俊介、蒲生澄子、岡前義春、佐藤俊男、佐藤映子、加藤祐策、寺嶋 潔【神奈川】福井俊彦、加古川正巳、白井香代子、田原やよい【長 野】後藤政俊【富 山】吉水慎一【石 川】伊藤義直【福 井】松田範幸、川島英樹、角谷喜代重【静 岡】村井美保子【愛 知】佐藤壮一郎、野田 清、宮地光男、西口誠一郎【三 重】大石博義、細野秀男【滋 賀】高畠典克【京 都】菱田健次、守本幸三郎、福田隆生【大 阪】山中善之祐、徳光弘介、赤星 明、深田礼子【兵 庫】川島 宏【鳥 取】足立逸郎【岡 山】奥埜美峰、奥埜啓子【広 島】白石 隆、西山絵理、山本伸二【長 崎】藤山聖子【熊 本】藤田八郎

【2月・3月の行事予定】

【会議】

2月13日(土) 第2回評議員会(東京)
2月20日(土) 第3回理事会(東京)
2月21日(日) 事務取扱責任者会議(東京)
3月13日(土) 常務理事会(東京)

― 第14回男子アジア選手権 ―
2月6日(木)～18日(日)
レバノン・ベイルートで開催

【大会】

2月12日(金)～14日(日)
全日本実業団チャレンジ2010(高知県)
3月20日(土)～21日(日)
第34回日本リーグプレーオフ(東京都)
3月25日(木)～29日(月)
第5回春の全国中学生選手権大会(富山県・氷見市)
3月25日(木)～30日(火)
第33回全国高校選抜大会(岩手県・花巻市)

※ 次号は3・4月合併号として4月1日に発行されます。

HAND BALL CONTENTS Jan. Feb.

(登録チームの購読料は登録料に含む)